
魔法先生ネギま！？ ~願い事は叶えられますか？

綺羅 夢居

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！？ ↗願い事は叶えられますか？

【NZコード】

N3073Y

【作者名】

綺羅 夢居

【あらすじ】

これはネギまの世界での生きることになった主人公と同じようにネギまの世界で生きることになったオリキャラ達の話です。（注意）原作キャラに対するアンチ表現があります。原作ブレイクします。それが許容できない方はお戻りください。

プロローグ（前書き）

始めまして、綺羅 梢悟と申します。

自分は就活生ですが、急に投稿したくなり、書き始めました。
どうかよろしくお願ひします。

プロローグ

目が覚めたらそこは知らない部屋だった。

とりあえず事態が呑み込めないので起き上がろうとするとき腕に違和感があった。

まず自分の左腕を見ると点滴の針が刺さっており、右腕には包帯が巻かれていた。

この時始めて鼻を衝くような薬品の匂いを自分の姿の着ている病人服を見てここが病院だとわかった。

(どうしてケガしてるんだ?)

昨日はバイトが終わつたあとは家帰りシャワーを浴びてすぐに寝たはずだった。

それなのになぜ自分は病院にいるのだろう、そして気がついたことがもう一つ、

(身体が幼い…………?)

そう身体が幼いのだ。自分の身体が明らかに縮んでおり、腕も柔らかく、大人のような筋張った腕ではない。

全く事情が呑み込めないのでとりあえずナースコールを押すことになった。

ナースコールをすぐに看護師さんと担当医である人がやつてきた。

担当医はまず身体に異変はないかと聞いてきたので身体が少し痛いですと答えた。

すると担当医は全身に軽い打ち身と少し擦り傷があると教えてくれた。

それから担当医は次々と質問をなげかけてきた。

「自分の名前は言えるかな?」

「司条 涼です」

「うふ、よく言えたね。じゃあ歳はいくつかな?」

名前はこれで良いうらしい、ただ身元がわからないだけかもしれないが。

そして年齢を聞かれる。恐らくだが正直に答えるとマズいよと黙り込んでしまう。

少し黙っていると、急にガラッといつ音とともに病室の扉が開く。

そちらの方に目を向けるとそこにはメガネをかけた男性が立っていた。

「すみません、司条涼くんが田を覚ましたと聞いて来ました」

「ううん、自分の関係者らしいが記憶を探しても男性のよつな知り合はない。」

担当医が男性に近づくとこくつか言葉を交わし、看護師とともに病室を出て行った。

男性は自分に近づくといへつか声をかけてくる

「よかつた、ケガはそれ程酷くはないようだね」

「あの、」

「ん? どうしたんだい?」

「誰、ですか?」

俺がそういつと男性は少し焦ったよつて問い合わせ掛けってきた。

「ほ、僕のことを見てないのか?」

「はい」

恐らく親などではないのだひつ。

「えと、司条涼くんは名前は覚えているよね?」

「はい」

「なら、どうして入院しているのかわかるかな？」

「…………」「めんなさい、わかりません。あのどうじですか？」

なぜ入院しているのかわからないので正直に答え、理由を聞く。

すると男性は少し氣まずそうにしながらも教えてくれる。

「君は事故に巻き込まれたんだよ」

「事故、ですか？」

「ああ、その様子だと事故の時の」とは覚えてないみたいだね、僕のことも覚えてないかい？」

「…………すいません」

「いや、謝る必要はないよ、ただ後でちゃんと検査を受けよう」

「はい」

「それじゃあ、また明日来るからね」

男性はやつ言葉を残すと病室から出て行つた。それと入れ替わりでまた担当医が入ってきた。

「の日は一日中検査と担当医からされる質問に答えた。

検査の結果、身体に異常はないが事故の影響から名前以外の記憶が

なくなつているといつ結果がでた。

当然のことながら、事故より前に何があつたかなどわかるわけもない。

そしてそのまま入院生活は過ぎていった。俺が目覚めた日に来た男性は毎日ではないが結構な頻度で顔を出し、ずっと俺と会話をする。

男性との会話でわかつたことは、

まず俺の年齢が5歳であること、

この入院のきっかけとなつた事故で俺の両親が亡くなつたこと、

ここが麻帆良とこう地名だとこと、

男性の名前が明石とことじらじこと、

この明石さんは夫婦そろつて両親と友人だつたといつこと、

明石さんはゆーといつ娘がいるといつことだつた。

そう、この時点で気づいたことであるが麻帆良、明石、ゆーな、少なくとも俺はこのワードが関連するものに覚えがあつた。

「ネギまの世界か~」

本格的にそうだとえる証拠は現段階では無いが、恐らくそういうなんだろうなといつのは、勘が告げていた。

ケガが治り退院した後、明石さんを連れて家に帰る。

とは言つても自分は家の場所を知らないのだから、正確に言つと明石さんに家に行つて貰つている。

遺産などの管理や手続きは明石さんがやつてくれたらしく。

本当に明石さんは感謝するしかない。

家に到着すると、明石さんが何か思い出せたことはないか聞いてきたが、元々ここでの記憶はないので否定しておいた。

家中を隈無く搜索する。

すると恐らく書斎なのだろう本棚が壁一面にある部屋を発見した。

部屋の中に入り本棚に近づくと明石さんも部屋に入ってきた。

それを無視したうつすらと埃が積もっている本棚から少し厚みのある本を抜き取る。その本にはこう書かれていた。

“西洋魔法の性質と運用方法”

「魔法か」

手に取つた本と俺の言葉を聞いたであつ明石さんが口を開いた。

「君のお父さんとお母さんはね魔法使いだったんだよ」

“魔法使い”

ネギまにおいて、原作を構成するための要素であり、役割である。未来人にして火星人の超鈴音曰わく魔法世界には六千七百万人いるらしい、つまり世界人口の百人に一人が魔法使いということになる。旧世界と呼ばれるこちら側に魔法使いが全員いるというわけではないだろうからこの計算が正しいのかわからないが。

それに魔法使いと言つてもあくまで全員が魔法を使えるわけではなく関係者だけということも考えられる。

しかし、ネギまの原作において魔法に関わることとは、基本的に戦闘行為に関わることを意味する。

魔法学校において一桁の年齢の子供もに戦闘魔法を教えるのだ。

基礎教育に攻撃手段が入っているあたり、魔法使いという存在はどれほどの危ないのかがわかる。

攻撃手段を保有するということは、魔法使いが戦力として数えられることが意味するし、

逆に攻撃手段を持たないといけないということも意味している。

「明石さん

「なんだい？」

「俺も魔法使いになれますか？」

しかし魔法使いなのだ。

もし自分が魔法を使える可能性があるなら、殆どの人間が魔法を使えるなりたいと思うだろう。

それにこの世界がネギまの世界であつたなら、やはり戦闘能力は欲しい。

たとえネギまの世界じゃなかつたとしても、魔法を扱えることで選択肢が増えるならそれもありだと思ひ。

確かに危険は増すが、もし魔法を覚えずに抵抗ができなくて死んで後悔するぐらいなら、魔法を覚えて抵抗して死ぬほうがマシだ。

「うん、なれるよ。僕もできる限り力になろう

こつじて俺の異世界ライフは始まった

第1話 家族は大事です（前書き）

文字数が少なく感じる、できれば4000から5000文字くらい
はほしい

第1話 家族は大事です

幸いなことに明石さんはすぐに許可を出してくれた。元々俺が言い出せば聞き入れようと考えていたらしい。

明石さんに魔法使いになつたことについて宣言をしたあとに自分の部屋に行き荷造りをする。

流石に一人でこの家に住むとこうわけにはいかないだろ？

ところとで明石さんの家で暮らすことになった。

「今日からうちで暮らすことになった司条涼くんだ」

「えと、よろしくお願ひします」

これからお世話をなるのでキッチンと頭を下げて、田の前にいる女性と女の子に挨拶をする。

「よろしくね涼くん、私は夕子よ。気軽に夕子さんって呼んでね
ほりつーゆーなも挨拶しなさい」

「あかしゅーなでーすつーよろしくね、すずみくんつー！」

やはり、親子だからだろう。一人とも雰囲気がよく似ている。

「じゃあ涼くんの退院おめでとうといふや明石家へのパーティーをするわよー！」

セーフティータナさんがダイニングに案内してくれた。

すると、わざすでに食卓には色鮮やかな様々な料理が所狭しと並んでいた。

「涼くんが退院つて聞いて張り切つて作ったのよ いっぱい食べてね」

タ子さんが笑顔で言つてくれた。この人は自分が一人増えることの負担なんてなんとも思つてないようだ。

普通だつたら、いくら友人の子どもであつてもここまでしてくれるはずはない。

それなのに、明石さんもタナさんも笑顔で自分を迎えてくれた。

裕奈ちゃんはまだ幼いので、ずっとドアドアしてくるんだだけで、

「ありがとうございます」

「涼くん!」

こじまとして貰つたのだから素直にお礼をいふと、タナさんは少し叱るような言ひ方でくる。

「涼くんは今日から一緒に家で暮らすんだから、そんな堅苦しくしないでいいのよ。だつて家族なんだから」

「つまらなかった以上は遠慮なくとまではこかなくても、少し腹をせてもいいね。」

「うんっー、あつがヒツヤセさん

……まあ、口調は作るんだけどね

すると、今まで黙っていた裕奈ちゃんがガマンできなかつたのだろうか割つて入つてきた

「おかーさんはかりズルい！わたしもすずみくことおじべつしたい！」

「ハイハイ裕奈、それよつせつかへの飯が冷めるから座れつか

明日さんが裕奈ちゃんを宥めると全員で椅子に座る。

席は俺の隣に裕奈ちゃん、向かい側には明日さん、その隣にタ子さんが座るといつ形だ。

ちなみに裕奈ちゃんは俺の隣は譲らなかつた。

たぶん、話しかけるのに近いほうがよかつたのだな。

「じゃあ、涼くんの退院と新しい家族が増えたことにかんぱーいっ……」

「かんぱーいっ……」

乾杯が終わり、皿の前にある唐揚げやサラダに手をつかる。

唐揚げは皮がパリッとしていて、中のお肉にもしっかりと下味がついており、サラダもちゃんと湯通ししてあるのだから、レタスがシャキシャキで両方ともとても美味しい。

「美味しいー！」

「やつ~やつ~言つてもいらざるとタ子さん頑張ったかいがあつたわ~」

タ子さんは俺に料理を褒めて貰えて嬉しいしつだ。やはり身内以外に褒められると嬉しいのだろう。

「ねえ~ねえ、すずみくん？」

「なに裕奈ちゃん？」

「む~~」

裕奈ちゃんに呼びかけられたので隣を向いてみると、裕奈ちゃんは頬を膨らませ剥ぐれていた。

「ゆーな

「裕奈ちゃん?」

「ゆーなってよんで~」

びつかりちゃん付けでよんでいたのがお気にならなかつたようだ。

「うん、わかつたよ裕奈」

「うそー。」

「のやつとつを明石わんは微笑ましくみてるが、タナわんは一や
一やとみていた。

……絶対楽しんでいるんだね! なあ

食事は終始「のやつに楽しく過ごしてこつた。

食事が終わると部屋に案内された。

「「」が君の部屋だよ」

部屋は割とシンプルでベッドとクローゼット、あとは勉強机と 大きめの本棚があった。

床には、自分の家で纏めたダンボールが置いてあった。すでに運んでくれてあつたらしい。

ダンボールの中には服よりも魔法関係の本が多く入っているが、

「荷物の片付けは明日一緒にやるとして、今日までもつ疲れただろうからお風呂に入らうか」

明石さんがそう言つてくれたので、着替えをバッグから取り出して、お風呂場の方へ移動した。

脱衣場で服を脱ぎ明石さんの方をふと見てみる。

明石さんの身体はインドア系の人間にもかかわらず、割と引き締まつていた。

メタボな中年男性が増えているなか三十代にしては見事な身体つきだろう。

それとも、魔法先生としての仕事が忙しくて痩せているのか……

魔法関係者ということで傷痕みたいなものがあるのかと思ったがそうでもなかつた。

お風呂に入つたあとは部屋に戻り、すぐに寝ようかと思つたが 荷物を少し片付けることにした。

明日手伝ってくれるみたいだが、やはり自分のことは自分でやっておきたい。

衣服をクローゼットの中にしまつ。といつても、服自体何十着もあるわけではなく上下十着程度だし、子供服なのでそこまでスペースをとらなかつた。

そして、ダンボールに詰められた本を本棚に移していく。

本は自分の家の書斎にあつたものの一部で、魔法入門書や初心者用の魔導書や西洋魔法の種類別の魔法辞典シリーズ本など、厚いもの

や薄いもの、大きい図鑑サイズのものや文庫本サイズのものなど様々だ。

明石さん曰わく、既に絶版になつていて希少価値の高い本もあるらしい。

子どもの身体では大きい本や本棚の上の棚には置けないので、軽い本を下から入れていく。

ある程度、自分に入れる本は入れた時だつた。

手にとつた本は表紙に何も書かれておらず、本全体が真っ白で買つたばかりの新品のようにキレイだつた。

本の中身が気になつたので開いてみると、中には写真が挟まれていた。

どうやら、自分と両親の写真のようだ。

写真の中の両親は、自分の知る両親と同じ顔をしている。

その瞬間、胸が苦しくなり悲しみが込み上げてくる。

向ひつにいた時は、親は元気だった。

でも、これからではもう親に会ひことはできないのだ。

そう考へると、目から一粒の涙が零れ落ちた。

…………「めんなさい、あなた達の子どもはあなた達に向もしてあげる

「…」

[写真を机の上に置き、改めて本の中身を見ると、これは本ではなく文庫本サイズのメモ帳であった。]

中には様々な魔法の術式とそれがどのようなモノなのかを書いてあった。

高位の治療魔法や最上位クラスの攻撃魔法などが書かれているのを見ると両親のどちらかが使用していたのだろう。

キレイ過ぎるのが気になつたがどうやら魔法をかけてこゐるようだ。

まさか、ナギ・スプリングフューレードと同じことをしてこゐるとは。

本は左上のほうに穴が開いてあり、どうやらリヒテンサホーンなどを通して落ちないようにしておいたようだ。

……これは、自分で持ち歩けるようにしておいた。

そう思い、本を机の上に置く。

「はあ、もう疲れたから寝よう。

」

第1話 家族は大事です（後書き）

誤字脱字の報告や感想をお待ちしています

第2話 でれる！」とやりたいです

明石家に暮らしが始めてから一週間が過ぎた。

まだ五才といつともあり、昼間は麻帆良のなかにある幼稚園に通つている。

幼稚園が終わると明石さんとタ子さんから魔法を教えてもらひ。

「じゃあもう一回“火よ灯れ”をやって」

「はーー・プラクテ・ビギナル “火よ灯れ”」

初心者用の杖を円を描くように振る。すると杖の先から火が出た。

明石家に住み始めてから、魔法の練習をしてみてどうやら普通の魔法使いレベルよりはすこし才能はあるらしい。

明石さん曰く

「涼くんの魔法を習得するのが他の魔法使いより早い」

とのことだ。“火よ灯れ”も普通であれば何百回も練習しないとできないらしいが、俺は三十四回目で完全に成功した。

といつても、習得するのが他人より少し早いだけで保有している魔力量については教えてくれなかった。

「すずみくんストーリー！おとーさんおとーさん、わたしにもやらせ

て！！

それどこには裕奈がいる。明石さん「俺が魔法を学び始めた頃から裕奈も魔法を学んでいる。

とはいっても裕奈なこれを遊びか何かだと思つてゐるらしく、魔法もおもちゃと同じぐらの扱いだ。

「よ～しつ、ふりくて・びきなる　　“あ～るですかつと”」

裕奈が勢よく杖を振ると、ボツと音をあげて火が灯つた。

「やつた～～～～～できた～～～～～できたよおとーさん～、すずみくん！！」

「おおつ～スゴ～ギゅーな～～～」

「つんつ～裕奈スゴい」

裕奈はこの口が魔法を覚えて三口だった。しかも魔法の練習は一日一時間しか行つていないので。

「まさか“火よ灯れ”がこんなに早くできるようになるなんて……」

明石さんも驚くほど早かつたらしい。

裕奈には魔法使いとしての才能がある。それは良い事なのか悪いことなのかはわからない。

でも、俺にとつて裕奈は大切な家族だから守らうと思つ。

魔法の練習が終わって家に到着するとタ子さんが夕食を作っていた。

「あっ、おかえりーつ！二人ともお疲れ様ね、もうすぐでご飯ができるから、手をあらうてきなさい」

手を洗い、椅子に座る。するとテーブルの上に料理が並ぶ。

「じゃあ、頂きます」

「「「いただきます」」

手を合わせて食事にはいる。これがいつもの光景だ。
最近食事をしていると裕奈があんをしてくる。

仕方ないのでそれに付き合いで箸に挟んであるプチトマトを食べた、
そしてお返しにハンバーグをあんをしてやる。

それを正面にいる大人二人はニヤニヤしながら見ている。

「そういえば、今日はどうだったの？」

「どうだったところは魔法のことだろう。

「ああ、順調だよ。それと今日ゆーなが始めて“火よ灯れ”を成功させた」

明石さんがそのまま驚く。タ子さんは裕奈の方に向くと

「ゆーな、今日杖から火を出せたのー。スゴいわねー！」

「うんっー、つえがぴかーってひかつてひがでたよー」

タ子さんも裕奈もうれしそうにしてくる。

するとタ子さんは裕奈のほうをジッと見て

「ねえ、ゆーな？涼くんのこと好き？」

「げほつ、げほつ」

「ありあなた、汚いわよ」

タ子さんはいきなり裕奈に向かつて屈託もない笑顔で聞いていた。

明石さんは飲んでいたお茶を吹き出した。

「すずみくん？　だいすきだよーーーー！」

「そつ、なら涼くんは？」裕奈は無邪気な笑顔で答えた。子どもに言われたことなのに妙に恥ずかしい。

「俺も裕奈のこと大好きです」

俺も嘘偽りなく答える。当然だ、嘘を吐く理由もないしこの元氣で明るい裕奈のこととは大好きなのだ。

「ふんふん、なるほどなるほど」

タ子さんは俺たちの答えに満足したのか、なにやら納得した表情を浮かべていた。

「こやこやタ子さん、一人にはまだ早いんじゃないかなー?」

明石さんがなにやら焦つたようにタ子さんに詰め寄る。

「いやー、せつかくだしどうせなら涼くんがいいかなーって

「それでも、パクティオーはまだ早いよー。」

“
パクティオー
仮契約”

なるほどじうじうの事でタ子さんさせたりの質問を俺たちこしたことだり。そうであれば納得だった。

ビーナスのタ子さんと裕奈と俺に“パクティオー”を見せたいらしい。

それを明石さんが止めてこらみだ。

「へへん、やつぱつダメか~」

いつの間にか明石さん達の話しが終わっていた。

ビーナス今回タ子さんが折れたようだ。少し残念そうしている。

「ねえ、パクティオーってなに? ?」

裕奈は気になっていたのだろうパクティオーについてタ子さんに聞く。

「好きな人と将来結婚できるおまじないよ」タ子さんは裕奈にパクティオーについて教える。その顔は何か企んでいる顔だった。

「じゃあ、パクティオーしたらすずみくんとけっこんすることができるのはー？」

「ええ、そうよ。ゆーなは涼くんと結婚する？」

「うんっ！、わたしうすみくんとけっこんする〜！！！」

タ子さんは裕奈の言葉に笑みを深めていた。

裕奈の言葉は所詮子どものころの他愛ない気持ちに過ぎない。

大人になるにつれて、いろいろな人を好きになり、子どものころの約束なんて忘れてしまう。

「俺も裕奈と結婚したいな」

当然、俺も裕奈の言葉に乗つて書いてみる。

俺の言葉にタ子さんはますます笑顔になつていぐ。

ひつひつして食事は進んでいった。

結局、パクティオーはしなかった。

明石さんが止めたというのと、パクティオーをする事でゆーなが魔法使いへの道に捕らわれたりしないようにするためだ。

魔法使いになるとまず魔法ありきで考えてしまう。それを防ぎたかったのだろう。

個人的には少し残念なことであるが仕方ない。

俺は部屋のベッドに寝転がると原作について思い出す。その内容は夕子さんの死亡時期だ。

夕子さんが死ぬのが裕奈が五歳のときだから、あと一年以内、早ければ数ヶ月、いや数週間かもしれない。

どうやって助ける？　どうやって助ければいい！？

見捨てるなんて選択肢はない。両親をなくした俺にとって明石家のみんなは大切な家族なのだ。

魔法世界に行くんなら、それを止めることはできないか？

……無理だ、そんな子どものワガママで仕事を止めるわけにはいかないだろう

誰かに頼む

……しけこそ無理だ、そもそも頼れる知り合いのいない

なら、夕子さんに気をつけるように注意を促すか

……しかしタ子さんもプロだ。子どもに言われるまでもなく、警戒しているはずだ。その結果が死亡なのだ。

なら、最後の手段、

“自分が異世界の存在だとバラす”

……これしかない、

たとえこれを話すことでもみんなと離れることになつてもよかつた。

この手段をとることで、もしかしたら実験台にさせられるかもしれないし、記憶を消されて自分という個我がなくなつてもよかつた。

いや、本当は怖い。

でも、両親をなくした今、自分を大切してくれた家族のためにできることをやりたかった。

ベッドから起き上がり、時計を見るとまだ十一時だった。

この時間なら裕奈は寝ているので都合がよい。

部屋からいると明石さんの部屋へ向かう、おれりく部屋で仕事をしているはずだ。

部屋の前に着くと呼吸を整える。やつぱり秘密を話すことへの恐れはある。

恐い、怖い、口つい。

せつかく仲良くなつた人達に拒絶されるのが恐い。せつかく好きになつた人達に嫌われるのが怖い。

……でも、このまま過ごしていたらタ子さんが死んでしまうかもしない。

もう一度、ゆっくりと深呼吸をする。

「……」で後悔はしたくないと覚悟を決めて、扉をノックした。

「入つていいよ~」

「失礼します」

部屋の中に入ると、そこにはたくさんの中の机で明石さんは書類仕事をしているようだつた。

「涼くん? どうしたんだい、こんなよる遅くに? もう遅いから寝ないといけないよ」

明石さんは俺がこんな時間にやつてきたことに疑問を持つものの、子どもなので早く寝るように俺に促した。

「あの、大事なお話しがあります。タ子さんと一緒に話したいのですがよろしいですか?」

明石さんは俺の口調と真剣な雰囲気を感じ取ったのか、すぐに真剣な表情になつた。

「わかった、すぐに呼ぶから待つてくれるかな」

明石さんはさういつと軽く田を開いた。せりやひ念話でタ子さんを呼んでこようだ。

数分するとタ子さんが部屋の中に入ってきた。その手にはお盆がありマグカップが三つ乗っている。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

「それで大事な話しつて?」

タ子さんから差し出されたマグカップを受け取り、中に注がれているホットミルクに口をつけた。

「はい、俺のことについてです」

いつもして長い夜が始まつた。

第2話 でれぬ「JAP」をやつたこです（後書き）

感想をお待ちしております

第3話 カミングアウトって恥ずかしいよね？

現在、部屋の中は静まり返っている。その静さが今の俺には辛い。

「秘密……ね、わかった。君にどんな秘密があるのか教えて貰おうか」

明石さんが真っ直ぐに俺の目を見てくる。俺は真っ直ぐとその目を見ながら、全てを語りはじめた。

「まず、始めに俺はこの世界での記憶がありません」

「君に記憶がないのは知っているが、この世界での…………とは？」

「まさか、自分には他の世界での記憶があるところみたいな言い方ね」

二人は訝しげな目で俺を見ている。

「ええ、その通りです。俺には別の世界での自分の記憶があります」

「嘘…………は言つていよいよつね」

「…………信じて貰えるんですか、わりと荒唐無稽なこと言つてゐるつもりなんんですけど?」

俺は一人が意外とあつさつと自分の言葉を受け入れたことに驚く。

「簡単なことだよ、魔法の中にほその言葉がホントかどうか見抜く魔法もある」

「それに涼くんが、わざわざ私達を集めてまで嘘をつく理由もないわ」

なるほど、すっかり忘れていたが、ネギがタカミチに対してもつて使っていた、人の思考を読む魔法か……なら話しあは早い

「ではお話しします。僕の記憶のある世界では、一冊の漫画が売られていきました。

その漫画のタイトルが“魔法先生ネギまー”です」

「魔法先生？」

「ネギま？」

二人は何故いきなり漫画について話しだしたのか疑問のようだが、俺の真剣な表情で話しているのを見て、大人しく話を聞いてくれている。

「はい、その漫画の主人公は大戦の英雄であるナギ・スプリングフィールドの息子です」

「……ちなみにその子の名前は？」

「ネギ・スプリングフィールドです。一九九四年生まれで裕奈より五つから六つ下になります」

「なら、そろそろ生まれてくるのかな？」

「はい、」

明石さんほ気になるのだろう。会話途中に質問を挟んでくる。

「続けます。物語は一〇〇三年一月、ネギ・スプリングフィールドが魔法学校を卒業した時から始まります」そして、俺はネギまのシリオを話出した。

ネギ・スプリングフィールドが修行としてこの地、麻帆良で教師をやることになったこと。

そのクラスには、中学一年生となつた裕奈や関西呪術協会の長である近衛詠春の娘などがいる」と。

麻帆良に到着したその日に魔法をバラしてしまつ」と。

正式な教員となるために担当したクラスを期末テストで最下位から脱出させること。

闇の福音エヴァンジエリン・A・K・マクダウエルと戦うこと

修学旅行で京都に行き、親書を西の長に渡すこと。

その際、妨害にあい、サウザンド・マスターが過去に封印したリヨウメンスクナノカミと戦うことになり、最終的にエヴァンジエリンに助けられる」と。

そして、ネギ自身が石化し、それを西の長の娘である近衛木乃香とパクティオーすること。

学園祭のときに開かれる武道祭でアルビレオ・イマのアーティファクトによつて父親と戦うこと。

学園祭最終日、ネギの子孫である未来人によつて全世界に魔法がバレるのを防いだこと。

魔法世界に行き、そこで拳闘大会に出場し、千の刃ジャック・ラカンと戦うこと

……そして、魔法世界の真実と決戦。

俺は自分が覚えている限りを全て話した。そして夢見の魔法を使い記憶にある二十六巻までの全てを一人に見せる。

そのなかには夕子さんが死んでいるといつシーンも当然ある。

「ふう、なるほど……」

「なるほどね……」

長い時間、話していたので三人とも一息ついた。

すでに話し始めてから、一時間が経っていた。マグカップに注いであるホットミルクもすでに冷めている。

二人も夢見の魔法の中で見たネギまの原作に惑いを隠せないようだ。

「涼くん、君に聞きたいことがいくつかある……」

「……はい」

「なぜ、君はこれを私達に話したんだい？正直隠してもよかつたはずだ」

「わうね、これ話をすことあなたは私達に本物かどうか疑われる可能性もあつたし、私達に信じて貰えない可能性もあつた、もしかしたらあなたを異端として排除したかもしれない」

「……それでも、タ子さんには死んで欲しくなかつたんです」

俺は自分の想いを一人に告げる。

「元いた世界の家族にはもう会えません。この世界にいた両親はもう死んでいます」

ぽつりぽつりと口から言葉が紡がれていく。それはもはや懺悔に近かつた。

「だから、もう家族を失いたくなかったんです、ただこの程度のことで家族を助けられるなら、何もしないで後悔はしたくないから」

本音を語るのが辛い……、嘘を言つていてるわけでもなく、言葉にやましいことを言つているわけでもないのに、ただ辛かつた。

二人が示唆している可能性は当然考えついた。だからこそ言葉にされると余計に怖くなる。

「それに家族ですから、一人のことを信じてますから」

やつにいた瞬間にタ子さんに抱きしめられた。

「あつがとく、やつに話してくれて嬉しいわ」

「うた安心してくれ、僕たちは涼くんを嫌つたりしないよ」

「でも、今まで隠してきたし、年齢のことも実際はもつと上なんですよー。？」

「う、俺は一人に黙つていたのだ。年齢のことも記憶のことも、もつと早く話すことことができたのだ。」

「そんなの関係ないよ」

「やうね、そんなの関係ないわよ」

だって、家族なんだから

一人の優しさがとても嬉しい。だから……

「ありがとうございます」

JJで感動のままでは終わらない。

しかし、物語はこのままでは終わらない。

「実はね涼くん、君から見せて貰つた記憶は現実では少し違つているんだ」

既に原作と違つてゐる可能性、それについては考えていた。

「まず、大きく違つてゐる所だけね。“紅き翼”にはあと二人メンバーがいた」

「二人“いた”ですか？」

「うん、二人いたんだ」

明石さんから知識との差異について明石さんがわかる範囲で教えてくれた。

まず第一に“紅き翼”には俺の知らないメンバーが一人いた。

一人はナギと同じ年で、ナギと同じように膨大な魔力をもつた魔法使いだったらしいが“墓守りの宮殿”での闘いで死んでしまったらしい。

そしてもう一人はタカミチと同じ年で、タカミチやクルトとは違い魔法を使って戦う、魔法使いらしい魔法使いであるらしい。

そしてどうやらその人物は――麻帆良にいること。

「会つてみたいかい？」

「はい、もしかしたら俺と同じイレギュラーかもしれませんから」

知識持ち

「なら、早く会えるなりと彼に頼んでみるよ」

「よろしくお願ひします」

自分と同じイレギュラーな存在。気にならないといつたら嘘になる。

「じゃあ今日はもう遅いか寝ましう、涼くんも私のために話してくれてありがとね」

「うん、そうだね、それと涼くん?」

「なんでしょうか?」

「君はいったい幾つなんだい?」

「記憶にある限りでは一十歳です。一応、大学に通ってました」

明石さんはさつきまでの話しで出てこなかつた、俺のことがしりたかつたよつの素直に答えておく。

「なるほど、今田は話してくれてあつがとう、おやすみなさい」

「はー、一人ともおやすみなさい」

「ええ、おやすみなさい」

明石さんの部屋を出て自分の部屋に戻るとボフツビベッドにダイブする。

一人が信じてくれてよかったです……

いや、夢見の魔法や思考を読める魔法があるから言じてくれる可能性は高かったのだろう。

それでも、もし受け入れてくれなかつたら、と黙つとゾシとする。

ただ、伝えられたとこつ安心感や話をしていた時精神的な疲労、そして夜遅いところ眠気が入り、すぐに眠りにつくことができた。

「どう思ひつへ..」

「せつもの話しこじとへ..」

涼くんが出て行つたあと先ほどの話しこじにてゆーじさんに意見をきいた。

正直、いきなり過ぎて頭がこんがらがつている。

「あの知識なら、信憑性は高いんじゃないかしら、私にメガロへの出張依頼が来ているの知つていてるでしょ？」

やつ、ゆーじさんは一ヵ月後にメガロへの出張依頼が来ていた。

「せつもん知つていてるよ、それでビリあるつもりだい？」

そう、依頼を請ければ自分が死ぬ可能性がある、しかし依頼を断れば自分以外の誰かが死ぬかもしれないのだ。

「そうね、でも期限はまだ先だし、まずは涼くんと彼を会わせてから考えるわ」

「よかつた、君が行くって言つたら僕は命がけで止めたかもしねない」

「まだ、時間もあるからね、それに私もユーなたちを残して死ねないわ」

そう言つてくれたことに安心する。いくら危険なことがわかつてこの仕事をやつているとはいえ、今回のように死ぬのがほぼ確定的のように示されていると行かせたくはなくなる。

「それにしても、彼の記憶には驚いたなあ

「そうね、もしかしたらああいつ未来が待つてたかもしれないと思うと……」

たしか、魔法先生ネギま……だったか、涼くんの記憶にあった漫画のストーリーには驚かされた。

「しかし、違う所もある

「そう、涼くんの記憶とはすでに違う所もあった。でも、なんにせよ……」

「全では彼を涼くんに会わせてからだな

「せうね、それがおわってからこれからのことを決めてこきまつよ
う」

学園長こもか親せきめぐべきなのだらうが、今まだ判断に困る。

「わうわえば、涼くんつて一十歳なのよね？」

「うそ、本人がそう言つていたしね」

「私、この前涼くんとむーなと一緒にお風呂入ったのよね～

ただ、明日から涼くんへの訓練は厳しくしようと想つた。

第3話 カミングアウトって恥ずかしいよね？（後書き）

感想をお待ちしています。

ちなみにこの作品は毎週水曜日と日曜日に更新の予定です。

話じのストックがあるとはいえ心配ですが…

では頑張りこれからもよろしくお願いします。

第4話　思い込みと勘違いは危険なものです（前編）

思つたより筆が進んだので、投稿します。

今回は新たなオリキャラが登場します。

ではじめ

第4話　思い込みと勘違いは危険なものです

明石さんたちに全てを話した次の日、なぜかいつもより厳しい訓練を終えて、家に戻るとそこには人が立っていた。

その人は、中性的な顔立ちで、長く真っ直ぐで綺麗な髪をしている。

一見すると女性のようにも見えるが、男性もののジャケットとジーンズを着ていて、性別がどちらなのかわからない。

「紹介するよ、彼は霧島きりしま 浅葱あわぎくんだ」

「口口シクね すずみくん 君の」とは明石教授から何度も聞かされていいるよ 」

その声は透き通るようなソプラノボイスで、跳ねるように言葉が聞こえてくる。

その姿と相まってか、始めて彼が男性と聞かされていなければ、間違いなく女性と間違えただろう。

「はじめましてあさきさん、俺の」とは涼と呼んで下れーイレギュラー」

その瞬間、彼の表情が一瞬だけ変化したのを俺は見逃さなかつた。

「なるほど なるほど 頼むやつなんだ 」

「とにかくとは、浅葱くん、君も知識を持つてこらのかい?」

明石さんの言葉に彼は笑顔で答える。明石さんがなぜ知っているのか疑問に思つていないうつだ。

「うん そうだよ ボクはその子と同じ知識持ち、でもなるほど、君はそれを選ぶんだね」

「知識をバラして介入することをいつてるのか？」

「そう」「

彼は何が楽しいのか、俺の方を向きながらうつと笑顔でいる。

「それにも驚かないんだな、明石さんに知識についてバラしたこと」

「だつて、二人しかいないならともかく、他の人がいる前でイレギュラーなんて言つたら、その人も知つてゐつて教えているようなものだよ」

なるほど、状況から推測されたわけか……どうやら、彼の方が一枚上手らしい。

しかし、考えてみれば当然だ。彼は大戦を経験し、自分より長く生きている。ただの学生であつた自分より、上であるのは当たり前だらう。

「それで バラしたのは何人かな？」

「明石さんとタ子さんの一人だけだ」

「うーん、よしつーじゃあ、今夜一人を連れて、図書館島の深部にきてね そこで君の知りたいことを話してあげるよ 」

「わかった。じゃあ今日の夜に

「それとボクのことはあさぎでこよ 」

そうこうとあわせの足下から魔法陣が現れ、それとともに消えていった。

田の前からあわせが消えると、息を一つ吐いた。

……霧島浅葱

彼は知識持ちといつては、俺と同じであるがそれ以外の部分では、遥かに上にいる。

魔法使いといつてはいつまでもなく彼が上だし、こちらが欲しがつていてる情報を持つていてもこちらが有利だ。

もし、こちらに情報を『』える対価として、何かを要求することができる。

そして、明石さんに知識をバラしたといつては反応が薄かったということを考えると、既にあちらも誰かに知識をバラしたか、もしかしたらバラしても問題ないような状況なのか。

「明石さん、あの人はいつもあんな感じなんですか？」

「ああ、普段はあんな感じだね、でも戦闘になつたり本氣になつたりすると雰囲気が変わるって聞いたことがある」

「……ですか……」

あの態度が天然なのかそれとも作つてているのかはわからない。

ただ、少なくとも俺には情報が必要だ。そのためには図書館島深部に行かなければならぬ。

そう、場所が図書館島深部ということも問題だ。

あそこには“紅き翼”的英雄、アルビレオ・イマがいる。

わざわざそんな所で話しかけてることはアルビレオ・イマも関わってくるのだろう。

……なかなかメンドくさいことになりそうだなあ

「涼くん、今悩んでいても仕方がないよ、まずは腹ごしらえをしよう」

明石さんは俺の表情の変化を感じ取ったのだろう。自分も行かなくてはならないから不安もあるだろうに、それを感じさせず、あまつさえ俺を心配してくれている。

……かなわないなあ、ホントに

これが一家の大黒柱ということなのだろう。その偉大さは俺の悩みを軽くした。

俺も家族を持てればこう成れるのかなあ？、

などとわからない先のことを考えるほど余裕ができた自分に安心する。

「そうですね、指定された時間は今夜ですし、時間まではゆっくりしましよう」

「ははっ、それだけ余裕があるなら安心だね」

二人で笑いながら、家に入つていった。

そして深夜、裕奈が寝付いたあと、さりげなく睡眠を深くする魔法を裕奈に掛けて、決して朝まで起きないようにする。

夜中に目覚めて自分たちが家にいることがバレないようにするためだ。

「これでよし……と、それじゃあ行きましょう」

タ子さんが家に鍵を閉めると、図書館島に向かう。もちろん篝に乗つて移動だ。

しかしながら、俺はまだ簾で飛べないため明石さんの後ろに乗っている。

「夜景が綺麗だ、それに気持ちいい」

「簾に乗って景色を見るなんて、魔法使いじゃないとできないからね」

空から見下す麻帆良も綺麗だったが、建物に邪魔されず見上げる夜空もまた綺麗だった。

空に近いためかいつもより星がはっきりと見える気がした。

そして頬を掠める風が心地良い。ただこれだけでも魔法を使える価値があるように思える。

そういうことで島に到着する。すると、そこには霧島浅葱がいた。その顔は目に会ったときよりも機嫌が良いように見える。

「お風ふりだね 涼クン 明石教授 そしてお久しぶりですねタ子さん」

相変わらず跳ねるような言葉で挨拶をしてくる。

「わざわざ出迎えてくれてありがとうございます、これからは案内してくれるんだね！」

俺たちはその場所があるということは知っているが、どこにあるのかまでは知らない。当然ロイツは俺たちを案内するために来たはず

だ。

「うん ジャあ涼クンはボクの後ろに乗ってね、お一人はボクの後ろをついて来て下さいね」

「うふ、わかったよ

「ええ、わかったわ

俺は無言で畠石さんの箒が降りるとあたぎの箒に跨がる。この時、あたぎに触らないのがポイントだ。

明日せんとタナセさんはこっちを見て苦笑しつつもあたぎの言葉に従う。

「それじゃあ、れつづー

あたぎのゆるい言葉で図書館島の内部を進み始めた。

そして、少し開けた場所に出る。確かにこれはドラゴンがいる場所だった。

すると、正面にある扉のまえにドラゴンが立つ。

「アハハ、まさかホントに学園の地下にドラゴンがいるなんてね

「さすがにこれは驚いたわ

二人は田の前に現れたドラゴンに驚愕しているようだ。

「いや、俺の知識で知っているといつても、媒体が漫画だったのでもういちじる信憑性に乏しかったのだな。」

「この人たちはお客様だよ 通してあげて 」

あさぎがドラゴンに話しかけると、ドラゴンは飛び上がりどこへ行ってしまう。

「じゃあ行こうか この先にみんなの疑問に答えくれる人がいるよ 」

そして、扉が開かれる。そこに入ると上から地下に閑わらば月の光のようなものが降り注ぎ、周りには、かなりの水が落ちる巨大な滝がある。

原作でここ¹の存在を知っていても、ここ¹の場所も周りの景色も別格だ。

初めて明石さんに魔法を見せてもらつた時に匹敵する。

「凄いと言つべきなのか、マジかよと驚くべきなのか

「素直に驚いていいと思うよ ボクもそうだったし 」

そしてまた、通路を進み始める。中央にある建物の中に入り、少し進んだ先にあつた扉を開けるとそこには一人のローブを着た人間が立っていた。

「ようこさん皆さん、お待ちしていましたよ

「アルビレオ・イマ?」

いや、今更ではあるが原作通りであるなりの人物はアルビレオ・イマである。

「いえ、私のことはクウネル・サンダースと呼んでください」

「ああわかったよ、クウネルさん」

「え、ええ、わかりましたクウネル様」

「私もクウネルさんと呼ばせてもらひこます」

わざわざ訂正してまでクウネルと呼ばせたいらしい。原作ではいつ名乗り始めたのかがわからなかつたが、もうすでに名乗つてているとは……

「では」

クウネルさんに案内されて、サンルームに入り、その中にあるテーブルに全員がついている。

テーブルの上には、紅茶と様々なお菓子が並べられていた。

あさぎはケーキやシュークリームを笑顔で食べている。

明石さんとタ子さんはこの状況に困惑気味だった。

無理もない。昨日いきなり俺に記憶のこととを明かされ、次の日にはドラゴンに出会い、大戦の英雄に出会つていてるのだ。

正直、俺もこの展開の早さにまついていけない。

「では始めましょう。司条涼くん、あなたの持っている知識との世界との違い」

クウネルが話し始める。その真剣な口調のためか少しずつ緊張感が増していく。

「そして、私たちが知る限りの全てをあなたたちに話しましょう」

今日もまた長い夜が始まる。この時はこれがまさか俺の人生に深い影響を与えることになるとは夢にも思わなかつた。

第4話　思い込みと勘違いは危険なものです（後編）

1日で2000アクセスを超えていたので驚きました。

皆さん見て下せりて本当にありがとうございます。

これからも頑張りますので、皆様よろしくお願いします。

第5話 相違点（前書き）

予定どおり更新日に投稿です。

この話で完全に原作ブレイクします。

ではじめ

第5話 相違点

クウネルさんは手元にある紅茶に口をつける。そしてゆっくりと話出した。

「まず涼くん、君の持っている知識を拝見しますね」

クウネルさんはその場を動かず目を閉じて呪文を唱える。

時間にして、数分ぐらいは経つただろうか。クウネルさんは目を開けて、こちらをじっと見てくる。

「ふむ、君の人生はなかなか面白いですね」

「つてオイっ……！」

そういえばこいつは他人の人生収集が趣味だったな。

「ああ、ついでに見せてもらつただけですよ。他意はありません」

「あ、あのクウネル様、話しを進めていただけますか」

「ああ、そうでしたね。涼くんの知識と現実との違いは二つあります」

明石さんが催促したからか、クウネルさんは話しを進め始めた。

「一つはここにいる浅葱くんと同じように、紅き翼にはもう一人、

君と同じ知識持ちがいました

「『』はつてことは、他にもこるつてことよね？」

「ええ、もう一人は『完全なる世界』にいました。そのあたりは私より浅葱くんの方が詳しいでしょう」

そう言つてクウネルさんは、あさぎの方へ目をやる。あさぎはとうと、これまでとは違ひその表情は真剣だった。

「といつことは、俺を含めて四人いたといつことになるのか？」

「ええ、少なくとも私にわかる範囲では君も入れて四人です。しかし、すでに知つていてると思いますが、こちら側の一人と『完全なる世界』側の一人はもうすでに死んでいます」

紅き翼と完全なる世界に一人ずつ。紅き翼はわかるが完全なる世界に属していた奴は何が目的だったのか。

「そして、もう一つの変更点は完全なる世界の目的です」

恐らく、『』の辺にそのもう一人の思惑が関わつてくるのだろう。

『完全なる世界』

彼らの目的は魔法世界を書き換え封じることで魔法世界人を救うということだったはずだ。

わざわざ『』やって言つ以上、多少の違いはあるのだつと思つていた。

「結果からいって、彼らの本当の目的は魔法世界を現実に完全に一つの存在として構築することでした」

「つまり、魔法世界といつ『幻想』を『現実』にするのが彼らの目的だったんだ」

「それはつまり、魔法世界にいる十一億人の救済を意味します」

正直、完全なる世界の目的が変更されていったのはいい。

ビーフサットとか、聞きたい」とまごへりもある。

……しかし

「『完全なる世界』の目的が知識とは違っていたのはわかつた。でも『紅き翼』は『完全なる世界』を倒したんだろ。それは何故だ?」

そう、結果として『完全なる世界』の目的が魔法世界の救済にあるなら、『紅き翼』と敵対するのはおかしい。

「それは……」

クウネルさんは言葉を濁し、苦い表情をしている。

「そこから先はボクが説明せてもいいよ」

クウネルさんが言葉に詰まっているのを見てか、あさぎが説明を代わる。

あさぎの表情は真剣で、口調も今までの跳ねるような口調ではなかった。

それがあさぎの本当の姿なのか。今日会つたばかりなのでわからない。

「まあ、実際に見てもらつたほうが早いから、今から夢見の魔法をみんなに掛けさせてはもううよ」

あさぎはそう言って、俺たちに魔法を掛ける。

夢見の魔法の始まりは『墓守り人の宮殿』

つまりは大戦の最終決戦の場面から始まった。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

『墓守り人の宮殿』が見渡せる高台に『紅き翼』の面々がいる。そこには幼き日のあさぎらしき子どもともう一人、男性がいる。男性には特に特徴といえるものがなかつたが、彼がクウネルさんが言つていたもう一人のイレギュラーなのだろう。

「ラカン、気をつけたらどうだ、油断して命を落としては元も子もない」

「はんっ！ テメーは警戒しそぎなんだよ、もつと余裕を持つたらどうだ」

イレギュラーと思わしい男性はラカンの態度に注意を送るが、ラカンはむしろ余裕を持つてそれに返している。

「ナギ殿！ 帝国・連合、アリアードネー混成部隊、準備完了しました」

若き日のセラスがナギに報告をしにきた。

「おう、あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりや、俺達が本丸に突入できる、頼んだぜ」

「ハツ、それであの……ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょ？ つか」

「ああ？ ああ、いいぜそのぐらー」

「そ、尊敬していました」

ナギはセラスにサインを求められ、それに素直に応じる。

決戦前なのに余裕あるな～、

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同

じだりい

「決戦を遅らせる』とはできないのか?」

『ヒドイレギュラーの男性が口を開く、ところがあまり喋らないんだな。

「無理ですね。私達でやるしかないとしよう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています……、『世界を無に返す儀式』をやつさは完全なる世界の目的は変わっていたはずなのに、『ヒド』ではまだ気づいていない……

『『気づいていたと思つたが、この時はまだボクたちは『完全なる世界』の目的に気づいていなかつたんだ』

頭の中にあざわらの声が響きわたる。

「世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです」

「ああ」

そう言つてナギは手に持つた杖を回す。

「浅葱大丈夫か?」

「はい、大丈夫です」

イレギュラー組は決戦へ向かうために魔力を高めている。

「よおしつ野郎ども、行くぜつーー！」

こづして決戦が始まった。

紅き翼の面々が『墓守り人の宮殿』に攻め込む。それを『完全なる世界』の面々が出迎える。

「やあ『千の呪文の男』また会ったね。これで何度目だい？」

完全なる世界の面々は紅き翼の面々に負けず劣らず濃いメンバーだった。

……若干、どちらも似てないかこれ、

「僕達もこの半年間で君に随分数をへらされてしまったよ。……この辺りでケリにしよつ」

たしか一番田だつたが、こづして見ている分には、表情の変化はほとんどないよう見える。それは無表情というわけではなく、少し楽しそうな表情だ。

人形とか言われてたから、もつと人間離れしていると思ったら、そうでもないんだな。

そづして完全なる世界と紅き翼の戦闘が始まる。

イレギュラー組は一人で完全なる世界のメンバー一人と相対してい

る。

「ふん、ここではちと狭い。場所を変えるか」

完全なる世界のメンバーが一人に対して転移魔法を使う。

「しまつた！－！」

「二人とも！－！」

クウネルさんが一人に近寄るが既に遅かつた。

二人が転移した先は墓守り人の宮殿の外であった。

「さて、少々相手をして貰おうかイレギュラー」

「イ、イレギュラーだとつ－－まさかお前も－－？」

「ああ、貴様らと同じイレギュラーだ、原作知識持ちだよ」

完全なる世界のイレギュラーが魔法を放つた。一人はそれを避けるが動搖をしているようであった。

「何故、お前は『完全なる世界』についている？！奴らは『世界を無に返そつとしているんだぞ！－！』

「『世界を無に返す』だと？何か勘違いしていないか？」

「惚けるな！！貴様も原作を知っているなら何をしようとしているか、わかっているはずだ！－！」

紅き翼側のもう一人が激昂したように叫ぶ。

「ふん、なら何故関わっているかもわかるだろ。簡単なことだ、完全なる世界の目的は原作とは変わっているのだよ……」

「目的が変わっている……だと？」

その瞬間、完全に動搖した一人に魔法が降り注ぐ。

「ぐわあああ……！」

「あああああ……！」

二人は降り注ぐ魔法に耐えきれず宮殿に叩きつけられる。

「『ホツ、そ、それで、お前達の、目的はなん、なんだ？』

ダメージは酷いが、もつすでに変わった完全なる世界の目的が気になるのだろう、紅き翼のイレギュラーが質問する。

「まあ、貴様らには苦汁を嘗めさせられたが、冥土の土産に教えてやるわ！」

そして、ソイツは一人に告げる。

「我々の目的は魔法世界全ての救済だ！－！」

「え、救済だと……？」

「ああ、そのためにこの魔法世界という幻想を現実に変える！！それがこの儀式の正体であり、貴様らの知っている原作との違いだ！」

紅き翼のイレギュラーは反論する。

「嘘だ！！俺達が調べた情報でもそんなことは書かれていなかった！…」

「当たり前だ、これは私と造物主ライフメイカーリアルしか知らないことだからな、他の幹部達ですら知らされていない」

ソイツは続ける。

「つまりはだ。お前達が今まで行つてきたことも、これから行おうとすることも全て無駄なんだよ」

「……む……だ？」

「そうだ、お前達が今まで殺した人間もこの儀式が止めるための戦いも全てが無駄だ」

その瞬間、紅き翼のイレギュラーは絶望した表情を浮かべる。

「むしろ、儀式が止められることを考えれば、貴様たちは魔法世界にいる十一億人を犠牲にすることになる」

そして、ソイツは腕を振るうと紅き翼のイレギュラーを殺した。紅き翼のイレギュラーはもうすでに立ち上がる体力もなく、抵抗することすらできずに絶命した。

「さて、残るは貴様だけだな」

ソイツはあざきの方に向き直る。

「一つ質問するよ。何故、他の幹部達にこのことを知らせなかつたの？そして、ナギに対する対策は当然つってるんだろうね？」

もつともな理由だった。幹部達に知らせておいても別に問題はなかつただろうし、やられるかもしれない以上、対策は練つてあるのだろう。

「まあ、答えてやる。さきほの田の質問だが、我々は必ずナギ・スプリングファイールドに敗北する」

「どうして？」

この場合のどうして？は対策をしてないことにに対する言葉だろう。

「アレは物語の重要なファクターだ、彼が敗北しては物語は進まない。それゆえに抵抗などするだけ無駄だ……、だからこそ他の幹部にもこの事は言つていらない」

「未来は確定していない！！ボクたちがいることが、お前たちの目的が変わっていることがその証拠だ！！お前も同じイレギュラーなら必死に足掻いて見せろ！！」

あざきが叫ぶ。そう、原作がどうであれ彼等の目的が変わっている以上、まだ変えられる余地は残っている。

そしてあわせはソイツに殴りかかる。

あわせのパンチをソイツは回避することなく、そのまま食いつた。

「ああ、お前のようすに真っ直ぐにいられたら抵抗もできただらう。
でも、私はもう疲れた……」

「疲れた？」

「今から行つてももつ間に合わん。だから、全てを語つてやる」

セツして、ソイツは語り始める。

「私の名はウーントス・A・K・マクダウエル、Hヴァの兄だ……

「Hヴァンジエリン・A・K・マクダウエルの兄いい！？」

あさきは驚いているが、俺も驚いている。それはエヴァに兄がいるのもそうだが、何故完全なる世界に入っているかである。

「私はエヴァとは違う不老不死ではない。この身体も無理やり魔力で保たせていくだけだ。直に死んでしまうだろ？」「

「…………」

「それに私は迫害され続けた。正直、魔法世界の救済なんてビツで
もいい」

「なら、なんで？」

「だからこそ、あの英雄たちに絶望を与えることで、この物語に、そして主人公たちに対する抵抗をしてやりたかったのだ」

そうして一瞬間に、ソイツの身体の崩壊が始まった。

「もう、私は保たないようだ。一つだけ、頼まれてくれるか?」

「なに?」

「エヴァに兄は満足して逝ったと伝えておいてくれ、あいつは私が完全なる世界にいることも知らない」

「わかった。伝えておくよ」

そうして、そいつ……ウントスは消え去った。最後にありがとうという言葉を残して……

そうしてあさぎは、また墓守り人の宮殿の内部へと向かう。

「アルさんー詠春さんーラカンさんー！」

「おお、無事でしたか！それで彼は？」

クウネルさんがあさぎの無事に微笑むがもつ一人がいない事に気がつき、あさぎに聞く。あさぎは首を左右に振ることで、もつ一人が死亡したことを伝えた。

「そうですか……、今はナギとゼクトがライフメイカーと戦闘中です」

既にナギとライフメイカーの戦いは始まっていた。

それを停めようとあさぎは動けないラカン、詠春、クウネルさんに全てを伝えた。

「なんですか！…それでは…！」

しかし、全てはもう遅かった。

ナギが造物主を倒し、混成部隊による封印術式が発動された。造物主が倒されたことで崩された術式の暴走を止めるにはこれしか方法はなかったのだ。

「浅葱くん、詠春、ジャック、このことは他言無用です」

「ああ、こんなことが世界にバレたらまた混乱が起きる」

そうして、このことはこの場にいる四人の秘密とされた。

これが世界にバレされたら、また世界の混乱が起ころり、復興が進まないのが目に見えていたからだ。

「これが大戦の真実です」

現実に戻った俺たちにあさぎは事実を告げる。

正直当事者でない俺ですら途轍もないショックを受けたのだ。当事者である彼らが受けたショックは計り知れない。

「まさか、『完全なる世界』が救済の為に動いていたなんて……」

明石さんたちもショックを隠しきれないようだ。

「これが嘘という可能性は？」

俺は当事者一人に質問する。確かに彼らの記憶ではそうだが、もしかしたらという可能性もあるからだ。

「あのあと、記録などを頼りに儀式に使われていた術式などを解析してみましたが事実でした。他にも調べられること全てをあたつてみました。どれも大戦中に得た情報か僅かにこのことを示唆する情報だけでした」

クウネルさんが唇を噛み締めながら言ひ。やはり彼らにとってこのことはとても苦い事実のようだ。

「他にこのことを知っている人は？」

俺はクウネルさんに対して疑問をぶつける。

「私と浅葱くん、そして詠春とジャック、あとはクルトくんでしょうね」

「なぜ、そのメンバーだけが？」

「ナギは単純です。もしこのことを知ってしまえば、英雄として活

動できない可能性がありました。それは戦後の復興にとつてマイナスになります。

そしてガトウとアリカ姫ですが、彼らの場合自ら死んでしまう可能性がありました。タカミチくんやクルトくんは英雄に対して強い憧れを抱いていたようなので、役に立たないと思つたからです。

現にクルトくんはこのことを知つてそれを覆そうと必死になつているようですし……」

そうしてクウネルさんとあわせは溜め息を吐いた。おそらくクルトに対する呆れからだらう。

「なら、学園長たちは？」

「学園長は魔法使いの責任と云つものに対する信用も信頼もできないですし、学園の魔法使いはそもそも信用ができませんから」

「では何故、私たちをここに？」

タ子さんがクウネルさんに疑問をぶつける。確かに学園の魔法使いが信用できないなら、何故一人を呼んだのか

「まず、あなた達が涼くんから知識を得たということですね。これによつて、他に情報を漏らさない為にもあなた達をこちら側に引き入れないといけませんでした」

「そして、ボクたちが行つていることのために人手が必要だつたんだ、それにすみクンを受け入れたあなたたちだったら、少なくとも他より信用できた」

あやめがそう呟つと、明石たちの身体から力が抜ける。

彼らから信頼を受けたといつて少しは安心できたのだろう。

「やううとしている事とは何かお聞きしても？」

「ええ、私達は現在『完全なる世界』の行あつとした儀式をもう一度行おうと考えています」

「もう一度、魔法世界を救う為の儀式を行う。それは自分たちで儀式を停めてしまった罪悪感からかそれとも……」

「でも、魔法世界を現実にしたとしても戦争の危険性が残らないか

そう、超のいた未来では火星と地球とで宇宙戦争が起つっていた。もし、儀式が成功したとしてもその問題が残る。

「それに関しての私達の解答がこれです」

クウネルさんから紙にまとめられた資料を手渡される。

「うー、これはー?」

資料に目を通した明石さんから驚きの声があがる。

「やう、火星ではなく新しい世界に魔法世界を存在させればいいといつことです」

そしてクウネルさんは続けた。

「昔から魔族達のいる魔界と呼ばれるものが存在しました。そして、浅葱くんや涼くんのような存在のお陰で、別世界の存在というのがあるということとも認識しました。

火星に魔法世界を現界させればまた戦争が起きる可能性がある。ならば、火星ではなく、きちんとした異世界を作り上げ、そこに魔法世界を現界させればいいというのが私達の答えです」

異世界を作り出し、そこに魔法世界を存在させる。

「今現在、ラカンは魔法世界で資料や魔法具などの収集にあたっています。詠春は西の総本山で陰陽道などの視点から資料を私達はここで資料を集め研究を行っていますが、状況は芳しくありません」

それはそうだろう。世界を創るなんて神様がするようなことを人間が行うのだ。簡単にできるはずがない。

「ですから、あなた方にも手伝って頂きたいのです」

クウネルさんとあさぎが俺たちに向かって頭を下げる。明石さんやタ子さんは困惑しているようだったが、俺は既に答えが決まっていた。

「わかりました。お手伝いさせて頂きます」

そう言つてクウネルさんたちに頭を下げる。すると明石さんたちも頭を下げた。

「正直困惑していますが、できる限りのことはやりましょう」

「私も英雄の力になれることがあるかわかりませんが、全力で頑張ります」

そして、今ここで俺がこの世界でやるべきことが見つかった。

こうして、俺たちは魔法世界を救うという大きな目標に向かって歩むことになった。

第5話 相違点（後書き）

今回はどうでしたでしょうか。

展開が急すぎる気もしますが、楽しく読んでいただけたら幸いです。

感想等お待ちしています。

第6話 現実の重み（前書き）

PV10000突破です。

皆さん本当にありがとうございます。

まだまだ未熟な私ですが、これからもよろしくお願いします。

第6話 現実の重み

俺たちがクウネルさんたちに協力をするようになつてからは、俺の修行はクウネルさんとあさぎがつけてくれるようになつた。

「“紅き焰”！」

“紅き焰”を空中に浮いてある魔法に当てる。

クウネルさんたちに修行をつけて貰い始めてからは、自分でも驚くほど魔法の技術が上達している。

しかしながら、修行は厳しくトラウマになりそうなほど、心身ともに追い込まれている。

「魔力が枯渇したらこれを飲んでね」

あさぎから笑顔で手渡されたのは修行を始めてから何度も目にした魔法薬である。

その効果は魔力の回復と増幅で飲む度に少しづつ保有魔力量が増えるらしい。しかし、增幅効果は子どもの時にしか効かないらしく、魔力が枯渇する度に飲まされている。

そしてこの魔法薬はあさぎが作っている。

あさぎのアーティファクト『鍊金術師の工房』の効果だ。

『鍊金術師の工房』は文字通り発動すると工房に繋がる。工房の中には作業台や炉、大釜などがある他、魔法関係に関する殆どの資料がある。さりにキッチンや寝室などの部屋などがあった。

あさぎによるとここでは魔法薬や魔法具など基本的に何でも作成することができるらしい。

俺が飲んだ魔法薬もその一部だ。実はこいつはエヴァに掛かってある“登校地獄”を解呪する魔法薬も作り、もつ既に解呪している。

そしてそのエヴァはとこうと……

「さつさと次の詠唱をやれつー。」

クウネルさんたちと一緒に俺を鍛えています。基本的に夕方は自分の家でタカミチに別荘を貸しているみたいですが、夜になると図書館島に来て、俺を鍛えてくれる。

何故、エヴァがここにいるかといつと、あさぎがエヴァの“登校地獄”を解呪したは良かつたのですが、魔法先生の反発や学園結界によつて力が弱まつてゐるため、学園長がここに留まれようと言つたようだ。

しかし、学園の外に出る事もできるし、外に出れば魔力は元に戻るのだからあんまり意味はありません。

「まあまあ あんまり厳しくしちゃうと最後まで保たないよ

そして、あさぎとエヴァは仲がいい。エヴァに兄の最後について話した時から仲がいいらしい。

兄の最後を聞いたエヴァは大泣きしたらしい。まあ、一人しかいな
い身内が死んだのだからそれもわかる。

そして、エヴァはナギを探すのをやめたようだ。妻がいる人間を追
う気にはなれないと言つていた。

それで仕方なく麻帆良にいるようにしたらしい。

麻帆良を守るのを手伝い、そして麻帆良にいる一般人には手を出さ
ない変わりに学園長から報酬をむしり取つたと機嫌良く話していた。

そして、ここにはもう一人いる。

「“魔法の射手・連弾・光の七矢”」

裕奈だ。

明石さんが結局巻き込まれることになるならと、クウネルさんたち
に魔法の指導をお願いした。

裕奈は俺ほど厳しくされとはいひないが先生が良いためか、実力はつ
いてきていると思う。

裕奈にはまだ何も話していない。というより、まだ幼いので話して
も理解できないだろう。

ちなみに修行はエヴァの別荘であるレーべンスシュルトの魔法球で
修行している。

始めにここを使つた時は夕子さんが歳を取るのはやだとか言つてはいたが、あさぎが老化を遅らせる魔法薬を手渡すと寧ろ喜んで使つようになつた。

魔法先生の仕事はストレスがたまるわ、纏まつた休みがないわで旅行にも行けなかつたらしく、下手なリゾートより優れているここはまさに楽園のようだと嬉しそうにしていた。

ちなみにあさぎを脅して老化を遅らせる魔法薬を強引に作らせていたのは、見なかつたことに対する。

そして、あさぎではあるが不老不死になつたようだ。

儀式の研究過程でできた不老不死の魔法薬、それを「コイツは何の躊躇いもなく飲みやがつた。

ちなみに不死殺しの魔法具も作れるらしい。

どんなチートだよ……

あさぎはエヴァーとも仮契約を結んだようだが、そちらのアーティファクトも同じものだつた。

どうやら、桜咲刹那のようにアーティファクトを一つ持つには条件があるようだ。

そして、俺も仮契約をする事になつた。それもあるとエヴァーの人と……

エヴァーは弟子としての俺を最高傑作に仕立て上げたいらしく、自分

の弟子だと主張するためには契約をする事になった。

あやめは自分と同じ存在である俺との繋がりのためといつていた。

「では、始めますよ～」

クウネルさんが仮契約の魔法陣を展開させる。

「おいつ！それは契約方法がキスの契約陣だろ？が…！」

エヴァがクウネルさんに怒鳴りつける。キス以外にも互いに祈りを捧げたり、血の交換や契約を唱えたりする方法があるといふのは知っていた。

「私はこの魔法陣しか知らないもので（笑）」

「嘘つけえー！！顔が笑っているぞ…！」

どうせクウネルさんはエヴァをからかう為に態とやつてるんだよなあ……

仕方がないのであさぎとの仮契約を先に済ます。さすがに男とキスとはどうかと思ったが見た目は女っぽいので、女と思い込むことでのとか乗り切る。

エヴァも諦めたのか。渋々と納得いかないような顔をしていたが、ちゃんとキスしてくれた。

二人とも俺が『魔法使いの従者』として仮契約したことで、パクティオーカードが一枚でた。
ミニスティル・マギ

絵が違うことからどうやら、アーティファクトは一枚とも違うらしい。

エヴァのカードのアーティファクトは『管理者の撻』、これは『造物主の撻』と似たような形をしている。

形状で違うのが『造物主の撻』が杖だったのに対して『管理者の撻』はキーブレードの形状をしていた。

そしてアーティファクトの効果だ。

魔法世界を管理する『造物主の撻』とは違い、『管理者の撻』はある程度の法則などの操作、創造ができる。例えば時間を操ったり、魔法などの使用を制限したり、重力を一時的になくしたりなどを行うことができる。

しかし、幾つか制約がある。それは効果範囲と制限時間だ。

『管理者の撻』の効果範囲は使用者の半径三十メートル以内に限られる。

そして、制限時間が一日十五分が限界でそれを過ぎるとカードに戻ってしまう。

その代わり、例えば新たに創った法則は使用者が解除しない限り消えないといったんでもない効果がある。

これが出了時はクウネルさんたちは驚いていた。これで儀式の研究が進むかも知れないと喜んでいた。

そしてエヴァーだがどうやらこのアーティファクトはエヴァーの兄、ウエントスが創つたものだつたらし。

そのアーティファクトが弟子である俺に出たところとどくとも嬉しそうだつた。

そして、あざきのカードからでたアーティファクトだ。

こちらのアーティファクトは『願いを叶える三本の糸』といふアーティファクトでいわゆるミサンガだつた。

効果はそのまんま三回願いを叶えることができる。しかし、使い切ると一年間、再使用ができなくなるらしい。

ビリのドリゴンボールだよ。

ちなみにこちらを見たときクウネルさんが狂乱していた。それはそうだろう、今まで全くといつていいほどに進まなかつた研究が一気に進むことになるのだ。

そして、それから先はこのアーティファクトの研究が開始された。

その結果幾つかできることがあることもわかつた。

一つ目は死者の蘇生

二つ目が世界の創造

三つ目が魔法世界を現実にすることであった。

もじこれらができるのであれば、俺たちの目的は達成されたも同然だつたのだが……

しかし光明もあつた。あさぎが俺のアーティファクトを解析する」とで、『完全なる世界』が行おつとした儀式は何とかできるようにならう。

それには時間が掛かるようだが、原作には間に合わせると真面目な顔で言っていた。

そして夕子さんの出張であるが、辞退したらしい。理由を聞くとこちらに関わなくなるのが嫌だったという。

出張は変わりにタカミチが行つたようだ。

これは正直嬉しかった。

夕子さんは大切な家族だ。死んでしまう可能性があるような危険には今まだ、関わってほしくない。

修行を始めて数ヶ月が経ち、一度田の小学生生活を迎えた田の」と、クウネルたちに呼び出される。

あまりに厳しい修行に呼び方もかわってしまった。

呼び出された場所にはクウネル、あさぎ、エヴァの三人がいた。

「涼くん、あなたには浅葱くんとともに魔法世界に行つて貰います」

クウネルがいきなり俺に告げる。

「魔法世界に行つてジャックと会い、そして魔法世界を見てきなさい」

「しかし、魔法世界はそれなりに危険だ。いくら私という最高の師のもと、お前の力がついてきたとはいえ、まだ弱く覚悟も足りん」

「だから、少し現実を見せてあげよ」とおもつてね

クウネルは俺に夢見の魔法を掛ける。

そこで見たのは地獄絵図だった。

魔法に撃ち抜かれ死んでいく人。

魔法の余波で手足が吹き飛んでいる人。

鬼神兵に押し潰される人。

戦艦が墜とされ死んでいく人。

広域殲滅魔法によつて肉片となつた人。

凄惨な光景であつた。

「これが大戦の事実です。当然これに参加していた私達はこれを行つてきました」

そう、これは戦争なのだ。戦争で大勢の人間が死ぬのはバカでもわかる。しかし、この光景は体験した者しかわからない。

「EJの世界において、魔法による事故死などは殆どありません。死亡理由の殆どが殺人です」

「お前がいるのはそんな世界だ。誰かが明確な意志をもち誰かを攻撃する」

そして殺し殺されるとEヴァアが言ひ。

「お前もこの世界に関わる以上こいつに遭うだらう」

その瞬間、夢見の世界が壊れ、何者かに襲われる。

襲ってきた相手を見ると、それは悪魔だった。

「私が召喚した悪魔だ。お前を殺すように言つてある。殺されないように気をつけろ」

Eヴァアたちはそう言つてその場から消える。そして俺と悪魔だけが残る

「がああああ！――」

悪魔が襲いかかってくる。そのスピードはかなり早く、反応が間に合わない。

悪魔が振るつた腕が障壁を破り俺を直撃する。

そのまま、悪魔の攻撃を喰らい続ける。訓練の時では反応できた攻撃も、今は反応すらできない。

これが本当の戦いで、これが命のやり取りをするところだった。

現実を知る。戦いを知る。そしてこの世界を理解した。

恐怖と痛みで竦む身体に喝をいれ、意識を切り替える。

相手は自分を殺そうとしている。

この世界にいれば、今後もこのよつなことは何度もあるだろ？

その時、今のように抵抗もできな「よつでは自分が死んでしまう。

殺られる前に殺れ

身体から魔力を解放する。

解放した魔力に悪魔が一瞬怯む。

その瞬間、瞬動で一気に距離を詰め、“断罪の剣”で一気に切り裂いた。そして、直ぐに距離をとり

“紅き焰”！

魔法をぶつけた。更に追撃で“魔法の射手”を連続で放つ。

しばらくすると悪魔は完全に沈黙し、消えていった。

これが人間だつたら、俺も人殺しになるのかなあ

「よくやった」

エヴァが現れる。ずっとどこかで見ていたのだらう。

「覚えて置いて下さい、これが実戦です。そして私達は何時でもこのような世界の住民だということを自覚しなさい」

クウネルは言ひ。この世界は危険なのだと、実戦では甘い考えは捨てろと……

もう既に今回のこととで俺は理解した。自分たちがどれだけ危ないのか、どのような危険があるのか……

まだ手には悪魔を切つた時の感触が残り、屠つたときの光景が頭に焼き付いている。

悪魔とはいえ、殺したという事実に身体が恐怖する。

しかし、それも一時的なものだった。あのような巨大なものを、人型をしたものを見たのは始めてだつたが、大戦の光景を見たためか思つていたよりの衝撃的な感情は湧かなかつた。

まあ、人を殺すのはまた別なのだろうけど……

こうして、俺は少しずつ知つていった。

第6話 現実の重み（後書き）

やつぱり文章の表現力にまだ難があるな～

展開も急な気がするし、やはりまだまだな～

第7話 英雄の実力（前書き）

ついにあのバグキャラの登場です。

第7話 英雄の実力

魔法世界に行くことが決定してからとつと訓練は一段と厳しさを増した。

まだ幼い俺の身体では圧倒的にリー・チが足りない。それ故に近接戦闘の技術はカウンター や一撃離脱、瞬動だけに絞り鍛える。

武器を扱うことも考え、いくつかの武器を試してみたが、どれも才能がないのか、上手く扱えない。

銃では的を外し、反動を上手く抑えられない。

剣や刀では振るうときに刃が綺麗に通らない。

エヴァの使っている糸は纖細すぎて扱えない。

唯一扱えるのが短剣だけであった。これなら軽く魔力を纏わせるだけで威力は上がる、“断罪の剣”を短剣の先から出すことでリー・チ差も短くなる。

ということで、短剣の修行はチャチャゼロが相手だ。

「ケケケ、ヨケネエト首ガ飛ブゼ」

「ちい！」

首を狙つてくる刃物を躊躇し、即座に短剣から出した“断罪の剣”で

斬りつけるが躲される。

今両手に短剣を持っているが右手の短剣しか、“断罪の剣”を展開させていらない。

魔力を節約するというのもあるが、まだ完全に両手には展開できないからだ。

「行クゾ」

チャチャチャゼロの攻撃を右手で受けるが、威力が強すぎて右手に持つ短剣が弾かれ手から離れる。

とつさに左手の短剣でチャチャチャゼロを迎え撃つがやはり躲され、目の前に剣を突きつけられる。

「ケケケ、マダマダダナ坊主」

チャチャチャゼロはそう言って、剣を下ろす。何手かは打ち合つことができるようになつたが、基本スキルの足りない俺では、まだまだもな勝負にはならない。

「まだまだだな、近接戦闘のみの制限があるとはいえ、お前にはチャチャゼロに勝てるくらいにはなつてもらわないとな

エヴァが俺たちの前に現れるがその顔はまだまだ物足りなさを感じているようだった。

「まあ、私達ではお前に教えられる近接戦闘を限りがあるのも事実だ。そういう意味では今回魔法世界に行き、ジャック・ラカンに会

「うとうのは貴重な経験だね。アイツは加減などできなーからな、しっかり揉んでもらえ」

エヴァはもう言つとチャチャチャゼロを連れて立ち去つて行く。

「まあ、今回の魔法世界訪問は君にとって良い経験になるでしょう？」

「ううだね それにボクも一緒に行くし、安心していいよ」

クウネルとあさぎが現れる。そう俺は明日から一週間の間、魔法世界に行くことになる。その後はこちらに戻つてきて、一週間京都にある関西呪術協会にお世話になることになる。

関西呪術協会に行つても大丈夫かと思つたがあさぎは関西にお世話になつていた時もあるらしく、俺はあさぎの弟子という扱いなので大丈夫らしい。

俺も魔法世界に行くのも京都に行くのも楽しみだった。

（早朝）

「じゃあ、気をつけろんだよ」

「大丈夫だとは思つけど、無理はしないでね」

「涼くん、わたしも魔法のれんしゅうがんばるから~」

そして、魔法世界への出発を迎えた。

家の前では朝早いのに明石家のみんなが出て見送ってくれる。いつのものが家族って感じがして自分の口元がほころぶのがわかる。

「じゃあ浅葱くん、涼くんのことを任せたよ」

「はい 任せとください」

あれれはこうこう時でも二つも通りだつた。変わらなコトバを見てもとなんか安心する。

「じゃあ、行つてきます」

そして俺たちは魔法世界に向かつ。

今回使うゲートは中国にあるゲートで、繋がる先はメガロメセンブリアで今日の夕方には繋がるようだ。

僕にはゲート近くの街にいたので、ゆっくりと昼食をとる。

「なあ、あやめ」

「ん？」

「魔法世界やうで他に変わったかもしねこと」とかはわか

らないのか？」

あさぎにふと疑問に思つたことを聞いてみる。今までコイツらに聞いたのは、原作と違うところだけだ。もしかしたら原作に描かれていない点でも少しほ違つてゐるかも知れない。

「うーん まずはメガロメセンブリアかな 大戦は彼らが起こしたことと、あの大戦では『完全なる世界』は人命救助をやつていたね ボクたちが『完全なる世界』だと思っていたのはメガロメセンブリア元老院の末端が勝手に『完全なる世界』を語つていただけだつたんだよ」

「つまりラスボスはMM元老院つてわけだ、なんとまあわかりやすい」

コイツらが倒した殆どがMM元老院の関係者か。戦争の発端はもう知つてゐるが……つまり

「まあ、結局彼らも魔法世界の住民の殆どが幻想といつことは知つてゐるからね

あの時、封印術式が成功したから元老院は今も魔法世界人たちを見下せるし、もしあの術式が失敗してしまえば、今まで見下していた存在が自分たちと同じ存在になる

でも儀式が失敗することで魔法世界の崩壊の危機に陥つたからアリカ姫を処刑しようとしたわけ

「結局、アリカ姫はどうなるかと処刑はされそつになるところ」とか

封印が成功しても元老院に捕まり、失敗して『完全なる世界』の目的が明るみになれば、それを止めようとしたとして処刑されただろう。

「不幸といつのはまさに彼女のためにある言葉だな」

どんなに頑張っても自分は不幸になる。他人を救うためにした努力が無駄であった。これを彼女が知つたらどう思つか……

「だからボクたちは眞実を教えなかつた。知らないことが幸せなこともあるから」

「……まあ、結局俺たちはできる」としかできないけど

「なり、もつと強くなつてもらわないとね 今のキノコやまだまだ足りなこよ」

「ひめせー」

「つして俺たちの飯食は進んでいた。

魔法世界に到着し、グラニクスに転移魔法を使いグラニクスの近くにあるラカンの住処に転移する。

「すみません～ ジャックさん～

あたぎは相変わらず軽い言葉使いでジャック・ラカンを呼ぶ。

「おおっ、来たか浅葱！！」

「お久しぶりです 」

すると建物の方から『テカイ男』が出て来た。

「そつちが例のガキか?」

「そうですよ ボクたちの切り札になります」

「同條涼です。よろしくお願ひします」

するヒジャック・ラカンは俺の背中を叩く。

「ハツハツハ、堅苦しい喋り方はやめていいぞ、お前も浅葱たちと同じなんだろーが」

背中が痛いが我慢する。まあ、いつまでもいるのだから遠慮することはないだろ?。

「じゃあ、先に今までのことを崩壊するね 」

そつちであれどラカンにどうまで研究が進んでいるのかを報告する。

俺のアーティファクトの存在で一気に進んだとはいえ、まだまだ完全なものにはほど遠い。

世界を創り、魔法世界をそこに移す。言葉にすればただこれだけだがその内容は想像を絶するほど難しい。

「なるほど、なら俺はこれまで通り世界を創る方法を探せばいいんだな」

「はい、あと様々な材料や書物の収集もお願いしますね」

この辺りラカンは眞面目なのだろう。眞剣な表情で話しを聞いている。

話しが終わるとラカンと俺は何故か戦うことになった。

「お前を鍛えてくれと頼まれているからな、まずお前の力をみせてくれや」

ラカンの言葉とともに俺は短剣を構える。残念ながらアーティファクトはどうやら使用禁止をクウネルたちから言われているので使うことができない。

短剣から“断罪の剣”を出し一気に距離を詰めて斬りつけるが、そもそも刃が通らない。

ラカンがパンチを放つてるので、それを瞬動で回避すると地面にクレーターができる。

直撃したら確実にアウトだな……

冷や汗が背中と頭に流れる。気のせいか体温が一度くらいくつたように感じる。

ヒットアンドアウェイを繰り返し魔法も混ぜるが有効的なダメージは与えられない。

それどころかラカンの攻撃を回避するたびに体力と精神力が削られていいく。

「“魔法の射手・戒めの風矢”！！」

このままでは埒があかないでの捕縛魔法を使い足止めを行い距離と時間を稼ぐ。

「契約に従い我に従え炎の霸王、来れ浄化の炎、燃え盛る大剣」

稼いだ時間を使い詠唱するが、ラカン相手ではそうは保たない。既に捕縛はとかれ、ラカンは瞬動を使い近づいてくる。

「ほどばしれよソドムを焼きし火と硫黄、罪ありし者を死の塵に」

「ちい……間に合わねえか……！」

ラカンが攻撃する前に詠唱が完了する。それをありつたけの魔力を込めて解き放った。

「“燃える天空”……！」

“燃える天空”はラカンを直撃したが、まだ倒したわけではない。

「光の精霊59柱、集い来たりて敵を射て “魔法の射手 連弾・光の59矢”」

追撃で魔法の射手を放つ。しかし……

「追撃はいい事だが、ちゃんと相手を見ないとなあ」

ラカンは後ろに回り込んでいた。そして、ラカンの右パンチをまともに喰らい、俺は意識を失った。

「どうだった 涼クンは？」

ボクはラカンに涼クンの印象を聞いてみる。ボクとしてはヒットアンドアウエイでダメージを入れられなかつたことから、捕縛魔法で時間稼ぎを行い、イチかバチかの大技を決めにいつたのは上出来だつた。

「まあ、捕縛から大技までの流れは上等だつたな、いくら俺様が手を抜いていたとはいえ直撃させたんだから上出来だろ」

どうやらラカンも同意見のようだ。今回ラカンは実力の殆どを出しえていない。もし本気であつたなら、最初の一撃で終わっていたと思うし、捕縛も直ぐに外せたハズだ。

ただ、まだ小学一年生の涼クンがラカンに一撃を入れた事には驚いた。

そして“燃える天空”まだ上位の魔法は教えたことも関わらず彼は使つた。

おそらく、どこかで練習をしていたのだらう。

「まあ、これから何処まで伸びるか楽しみな奴だぜ」

「ふふ、そうだね」

ボクと同じイレギュラーである彼は重要な役割を持っている。

だからこゝで……

「ボクも頑張らないとね」

「ああ？なんか言ったか？」

「ううん、何でも」

少しだけ、未来が楽しみになった。

目を覚ますとベッドに寝かされていた。ビーフやらラカンの攻撃をまともに喰らって気絶したようだ。

あれが英雄の実力か……

わかるように手加減された状態で手も足も出なかつたのだ。

わざわざ隠れて練習して覚えた“燃える天空”ですら、ジャック・ラカンには通用しなかつた。

「おおつ、もう起きたのか」

様子を見にきたラカンが声を掛けてくる。

「まあ、お前もよく頑張ったが、まだまだこの俺には勝てねえよ

ラカンは皿邊するように言つた。

「とりあえず、こつちにいる間は鍛えてやる。ついでに拳闘大会に出て実践を積んでこい。じゃあ、大丈夫そだから外に出な」

そう言つてラカンは俺を外に連れ出した。

「まあ、お前の場合基礎はできているみたいだが、全て小手先の技術なんだよ」

ラカンは俺の戦闘方法の考察を述べる。

「確かに戦術の面ではそこそこできるが、俺たちのような格上の存在相手には圧倒的に火力が足りない。現に“燃える天空”も防がれただろ」

ラカンの言つ通りだつた。断罪の剣で近接戦闘ができるようになつても戦いのバリエーションが増えただけで、根本的な火力不足を補うことにはならない。

そのための“燃える天空”だつたのだがこつして防がれたことを考へると更に火力を上げる必要がある。

「純粹に“燃える天空”のような上位の魔法を覚えたり、鍛えて威力を上げたりもしてやつてもいいが、ここはやっぱり必殺技だろ！」

ラカンはそう言つて、ホワイトボードにいろいろ書き込む。

「とりあえず、じつにいる間に俺の防御を超えてダメージを与えるような必殺技をつくれ！！」

こうして俺は魔法世界にいる間に必殺技を作らなければならなくなつた。

第7話 英雄の実力（後書き）

といつわけでラカンの登場です。

彼は好きなキャラなんですが、今の作者の力量では彼を表現するの
はこれが限界です。

ですから、もっと精進できるように頑張ります。

「」で一つ、皆さんに質問があるので、皆さんのがネギまで好きなキャラクターは誰でしょう？

書いていただけたからといって、そのキャラクターの登場頻度が多くなつたりはしません。

純粋に作者の興味で皆さんに質問しています。

感想欄に好きなキャラクターとその理由、できればこの作品の感想などを「」記入ください。

ちなみに作者は前述した通りラカンが好きです。

男らしさや面白さもあり、いろいろと理屈を超越した存在ですし、
ラカンのこと嫌いな人っているんでしょうか？

長くなりましたが、これからも「」の作品をよろしくお願いします。

第8話 必殺技ってゲームじゃ使えないって感じるのもあるよね？（前書き）

主人公の必殺技の完成です。

……原作突入までまだまだあります。

第8話 必殺技ってゲームじゃ使えないって感じるのもあるよね？

魔法世界に来てから一週間、拳闘大会に出つても必殺技を考える日々が続いた。

拳闘大会では未熟な俺では拮抗、もしくは格上の相手が多かつたがラカンのように攻撃が通らないというわけではなかつたので、絡めを使つたり、エヴァたちに鍛えられた機動力や防御力のお陰で苦戦はするものの何とか勝利を收めていった。

あと、六歳の拳闘士ってことで何度も取材を受けたが、適当に流しておいた。

しかし、一度だけ負けた試合があつた。

その日は一日二試合入つていて、先の試合で格上と大戦し辛くも勝利を収めたが魔力を大量に消費し、次の相手が一試合目より更に格上だつた為、終始粘つたが結局そのまま押されて負けてしまつた。

その際、身体の骨が折れたりしたが、意外と大丈夫だつた。

どうやら俺もこの世界に染まつてきていいよつだ。

そして、俺が負けた相手はトサカだつた。

まさか、原作に出てる奴と戦う事になるとは思つていなかつたが、まさか負けてしまうとは。

トサカは原作での実力を見る限りそれ程高くないようだと思えたが、攻撃力が高く、俺より遥かに実戦慣れしているため、試合を巧みに進められた。

そして試合後にラカンとあさぎが治療している俺の見舞いをしに来たときに、ちょうどトサカも居合わせ、ラカンからサインをあさぎからばマジックアイテムを貰っていた。

あさぎのマジックアイテムは魔法世界では一種のブランドとなつていろいろしく、高値で取り引きされると本人から聞いた。

トサカはあさぎからマジックアイテムを貰うかわりに俺たちがここにいる間、俺の組み手の相手をしてくれることになった。

何でも、あさぎやラカンでは実力が離れ過ぎていて練習にはならないうらしい、だから、俺より実力が上でさらにつまみに闘つことのできるトサカに相手を頼んだようだ。

トサカ……今はトサカさんと呼んでいるが、彼も快く引き受けてくれた。

お陰で近接戦闘の技術が伸びるが、何故かトサカさんも一緒に鍛えられていて、一向に差が縮まつていないように思える。

そして今はラカンと対峙している、完成した必殺技を見せるためだ。

「じゃあその新しい必殺技を撃つてみろ」

ラカンは気を放出して防御を高める。

俺はといふと右手に持つた短剣から“断罪の剣”出して剣道でいうところの上段から更に剣を寝かせた形で構える。

「まさか、それを思いつきり放つとかじやねえだろ？　なあ」

ラカンが俺の構えから推測したのか呆れたように呟く。

確かに間違つてはいないがまだいくつか工程があつた。

“断罪の剣”の術式を書き換える。すると魔力でできた刃が書き換えるられて、術式で作られた刀身が現れる。

“神斬の太刀”

これが俺の新しい必殺技だ。

魔力を刀身に注ぐと刀身が巨大化する。これにはラカンも、そして近くで見ているあさぎ、トサカさんも驚いている。

「壱の太刀“地碎き”！！」

「やべえ！！！」

そして思いつきり振り下ろす。振り下ろした太刀はラカンを直撃し更に地面を粉砕する。

思つたより威力が低い……まだ練度が足りないのだろう。

俺はまだまだ威力に納得していないが、ラカンが全力で気合防御し

たのだ。おやらいまともなダメージになつていなければ。

土煙と水煙は晴れ中からラカンが出てきた。案の定大したダメージではないようだ。

「充分だな、まさか俺の全力の防御を超えるとは恐れ入ったぜ」

「そうですね あなたがあれだけ焦つたのも久しぶりに見ましたよ

」

「うやら俺の攻撃はラカンにダメージを与えることは出来たようだ。しかし腕に少々の切り傷を負わせただけだったが……

「まあ、まだガキだからな、もっとデカくなりやあ更に威力も上がる」

「うして俺の必殺技は完成した。

正直に言えばもっと広範囲に特化した魔法を創りたかったが、今はまだこれで充分だろう。

そしてこの日から一つ変わったことがある。

トサカさんがラカンに弟子入りした事だ。俺の必殺技を見て触発されたらしい。

俺に対して、絶対負けてやらねえなどと言つていた。

こうして一週間の魔法世界での生活を終えた俺たちは旧世界に帰った。

グラニクスを出立するときはトサカだけでなくチーフたちまで見送つてくれた。

魔法世界では実戦をこなす事で大分実力はついたと思う。

しかし、終始トサカさんには負け続けたんだが……

ただ、魔法世界では全然暮らし方が違う。メガロでは近代的な生活もあり現代の日本に近かつたが、グラニクスはどちらかといつと中東の国々に近いイメージがある。

魔法が公になつていてるぶんだけ、便利な面もあるが危険という面ではこちらの方が危ない。

しかし、ここには笑顔が溢れていた。日本のよつに堅苦しく冷たく感じるような社会ではなく温かみがあった。

俺たちはこれを守らないとならない。

「これが魔法世界だよ。ボクたちが守り、救わなきやいけない世界」

あさぎが真剣な表情で呟く。

「ここにいる人たちはボクたちと何にも変わらない。だから、ボクたち『紅き翼』があの儀式を停めたとき、この世界を救うチャンスを一度逃したんだ」

あさぎは悲しそうな表情をしている。それは懺悔のよつこも聞こえた。

「もし魔法世界が崩壊すれば、間違いなくそれは『紅き翼』のせいだろうね。だからこそボクたちは、この世界を救うために頑張らなければいけなかつた」

「『紅き翼』の責任がどうとかは別にいい

あさぎの話しだけで俺はあさぎに言つてやる。

「少なくとも俺はお前らが魔法世界を救うと言つて、その手段を聞いて納得したから手伝つていた」

本音を言つてしまえば魔法世界がどうとか紅き翼がどうとかはあまり関係なかつた。

ただ、より良くなる可能性がある「ひらめき」を手伝つていただけだ。

確かに思わない所がないわけではないが、自分に取つては過去のことで実感はなく、明確な意志があるわけではなかつた。

……魔法世界に来るまでは、

「俺は今回魔法世界に来てトサカさんたちに会つた。の人たちを救いたいからこそ行動する。お前らの罪がどうとか知つたことか！」

更に続ける。

「義務感や罪悪感で救うなんて言つた！お前らは英雄なんだろう！…なら助けたいから助ける、それでいいだろうが…！」

「うふ…… そうだね」

あたぎの顔に笑顔が戻る。

「うとうん、 そうだよね やっぱり義務感や罪悪感で世界を救うなんて間違ってるよね」

「切り替えはええなおい」

あたぎはせつときの真剣な状態から、何時もの明るい状態に戻る。口イツのシリアスなんて似合わない。何時も調子に戻つたことでホッと一安心する。

「涼クン」

「なんだよ?」

「…………ありがとうね」

「…………いたしまして」

「うして俺たちは魔法世界をあとにして、京都に向かう。

京都につき、関西呪術協会にたどり着くとそこではたくさんの方々
さんが出迎えてくれた。

そして今は謁見の間にいる。

「お久しぶりですね 詠春さん」

「お久しぶりです浅葱君。そしてはじめまして司条涼君」

「はじめまして詠春さん。やはり俺のことは」「存知で?」

目の前にいる近衛詠春はやはり少し老けていて、顔も少しあつれている。

「ええ、アルとも連絡はよくとっていますから」

「どうやらクラウドネルとの連絡で俺のこと知ったようだ。

「それに聞いていますよ。あのジャックに一撃を」「えたと

さすがに情報が伝わるのが速い。

「ここは何ですから私の部屋に行きましょつか」

そう言って詠春さんは俺たちを自分の部屋に案内する。本来であれば許されることで止められてもおかしくはないが、あさぎは関西にそれだけの信用を得られているのだろう、素通りだった。

詠春さんの部屋に行くと儀式の研究の進行具合についてあさぎが報告する。

詠春さんは額あつつも難しい顔だ。やはり神経質な性格がここまで

思い悩ませて居るのだろう。

報告が終わると話題は変わり、関西呪術協会と近衛木乃香のことに入る。

「関西呪術協会は私が陰陽道の研究をしているためか術者の力量が全体的に上がってきております」

「??、それはいいことじゃないんですか?」

術者の力量が上がる」とは組織としては問題ないはずだ。

「はい、確かにいい」とはあるのですが……」

「過激派だね?」

「そうです。過激派の力量も上がってしまい、一部では関東に攻め込もうとする輩も増えています」

それは問題だった。学園結界によつて高位の鬼などが呼ぶことができないから大丈夫かとおもつていたが、陰陽道は式紙だけではなく、符術もある。

それにヘルマンが原作で侵入できたことを考えると学園結界はあまり意味をなさないだろ?。

関西自身は詠春さんが儀式のためとはいえ陰陽道の研究を行うことで全体の力量が上がったため、詠春さんの立場や発言力も増しているがそれでも全体を纏めるには至っていない。

「やつ言えば木乃香ちやんはびつしたの」

「木乃香は麻帆良に通っています。魔法についても教えていません
どうやら近衛木乃香はすでに麻帆良にいるらしい。しかし、魔法を
教えてないのは何故だ。

「ここについては魔法について知る機会が作られる可能性があります。
それに麻帆良にはアルやエヴァもいますし君たちもいますから安心
ができます。

「魔法について教えてないのは、日常にも選択肢があることを教える
ためです。魔法に関わっているところからにしか目がいきませんか
いら……」

詠春さんは親としてよく考へていていた。確かに木乃香の才能
であれば多少スタートが遅れても一流の術者になることは難しく
ないだろう。

「そして一人にも木乃香の護衛をお願いしたいのですが、よろしい
でしょうか？ もちろんずっととは言こませんし、報酬も支払います」

「いえ、報酬は」

貰うわけにはいかないと言おうと思つたが詠春さんが、

「これは正式な依頼ですし、報酬を支払うこととで君達には責任を負
つて貰います」

と並んで。やつ言われてしまえば、断るわけにはいかない。

「わかりました」

「謹んでお請けします」

一人で対照的に返事をする。詠春さんは満足そうな表情だ。

「期限は木乃香が中等部に入るまでになります。その時に魔法についてを木乃香に教えるので、その時にはまた指導などを頼む」ととなるでしよう」

「木乃香さんには全てを話しても？」

「はい、構いません。これは妻と出した答えですから」

詠春さんはその選択に後悔などはないようだ。

そのあとも話しあは続くがどうやら儀式や大戦の真実について詠春さんの妻、木乃美さんは知っているらしい。

と言つても知つてているのは詠春夫妻だけのようだ。

話し合いが終わり、詠春さんが用意してくれた宴に参加する。

出てきた料理は絶品で、周囲にいる巫女たちも綺麗な人ばかりだったので十二分に満足して、その日が終わった

第8話 必殺技ってゲームじゃ使えないって感じのものあるよな？（後書き）

「意見、」感想をお待ちしています。

第9話 基礎は大切ですね（前書き）

更新予定日の投稿です。

第9話 基礎は大切ですね

京都に来てからは神鳴流の道場に通わせて貰っている。

とは言つても神鳴流の技を教えて貰つているわけではなく。刃物を使つた戦い方の基礎を教えて貰つてはいる。

一度こここの師範代と試合をさせて貰つたが、武器の取り回しは軽く短い分こちらが有利かと思つたが、斬りかかつても完全に見切られ、技を放とうとするとその前に攻撃をいれられた。

横で見ていた詠春さん曰わく、歩法や瞬動はまずまずだが、そもそも武器の扱いが雑のことだ。

瞬動で懷に潜り込んだときの短剣の振るいかたが上手くないらしい。

素手での格闘術は違和感なく力を伝えることができるが、短剣を持つと動きがぎこちないと師範代さんの言葉だ。

といつわけで武器の扱い方を一から習つてはいる。

短剣の使い方、“断罪の剣”を使ったときの使い方、そして一刀流

……

基本的な動きを身体に叩き込む。

これをやつているとチャチャゼロやラカンがどれだけ大味な戦い方

だつたのかがわかる。

今は一撃一撃意識して振っているが、無意識でもできるようにならないと実戦では使えない。

練習をしているうちに初撃は上手くいくようになったが、連続して短剣を振るとまだまだ剣筋が上手く通らない。

これは反復して身につける技術なので一朝一夕でできるなんて思っていない。

そして反復を繰り返す。

唐竹

袈裟斬り（けさぎり）

右薙

左斬上

逆風

ひだりきりあげ

左薙

逆袈裟

刺突

何度も何度も身体に身につくように、手に持った短剣を振る。

右手、左手、あるいは両手で日が暮れるまで振り続けた。

神鳴流の師範代さんに負けたのは単純に一つだけを学び研鑽を続けた者と俺のように魔法や武器など複数の分野に手を出し半端になってしまった者の差であった。

言い訳をするなら、魔法を使用することができるなら師範代さんであれば、あれほど簡単には負けなかつたと思う。

しかし、制限があつたとはいえ負けてしまったことはかなり悔しい。だから、次は負けたくない。

「神鳴流を学んでないくせに生意氣なんだよーー！」

俺は今、神鳴流の門下生数人に囲まれている。

門下生との試合では、年上が相手でも負けることはない。

それは外を知っている俺と知らない彼らの差であろう。しかし、彼らは自分より年下の子どもに負けるのは我慢がならないようだった。

彼らも神鳴流という流派に誇りを持つていて、神鳴流の技を習わないのに道場にいる俺が気に入らないらしい。

見たところ八人がいて手には木刀を持っている。

「余裕ぶつこいてんじゃねえ！！」

一人が斬りかかって来るが、気もまともに通つていらない木刀などねる過ぎる。

木刀を叩き折つて、顔面に蹴りを入れる。

「ぐわあ！――！」

そして近くに一人に魔法の射手を撃ち込んだ。

「うわあ！――！」「がはっ！――！」

まだ未熟なのだろう。二人は避けることも迎撃もできないまま直撃を喰らつた。

「“氷爆”」

めんどくさいので残り全員に魔法を放つ。一人には回避されたが他の四人はこれで氣絶した。

「まだやるの、これ以上やると君たち破門になるんじゃないのか？」

そもそも負けた腹いせに複数人で相手に掛かるとしているあたり問題であるし、俺は関西にとつて客人である。何より……

「俺が関西の客人だということを忘れてないか、それにそんなみつともない所をそこにいる人に見せるつもりか」

そう言つて木を指差すと人が現れる。

そこにいたのは長い黒髪が綺麗な和服美人だ。

「！」、木乃美様」

「何をやつておるのですか？」

「い、いえ。これはですね……」

「言い訳は無用です。追つて処分を伝えますので、覚悟なさい」

「はい！」

俺を襲つてきた門下生たちが、仲間を抱えて逃げる。

美人ながらその様は怖い。

「まつたく困つたもんやなあ、客人に対する礼儀すらなつとらへん

「まあ、俺はケガはないですし、あの程度なら問題ないですよ」

「強いんやなあ。門下生とはいえ八人を相手にしてあの程度なんて」

木乃美さんはくすくすと笑つている。

「どうせやつたら、木乃香と婚約せえへん？あの娘はうちに似て美人になるえ～」

「考えておきます」

確かに木乃香の婚約者というのはおいしい話しだはあるが、冗談で

言つてこいるのがわかるのだ。素直にほいなんて言つわけがない。

「まあ、ええんやけどね」

木乃美さんは少しつまらなそうだ。

「後でのあのナラの処分も伝えるから、楽しみにしてくんやで～」

いや楽しみつて

木乃美はなんとこつかイタズラ好きとこつか少々子供っぽい面がある。

ただ、組織を纏める人間としては一流で公の場ではその美貌も相まって、一種のカリスマ的役割を果たす。

今現在、関西呪術協会が曲がりなりとも纏まっているのはこの人のお陰であろう。

後日、俺を襲つてきた奴らがかなり厳しくてあつたところは師範代さんから聞いた。

今俺は師範代さんと向かい合つてこいる。

既にここに来て十日、十五歳以下の門下生は殆ど倒した。

他は戦わせてくれないのや、もつ一度師範代さんに勝負を挑んだの
だった。

「では、はじめて……。」

審判の合図とともに斬りつけるがやはり受け止められてしまつ。

瞬動を使いすれ違い様に何度も斬りつけるが全て反応され、迎撃される。

「いや驚いた、まだ基礎を教えるだけでここまで伸びるなんて」

師範代は驚いてはいるが余裕の表情だった。

その余裕がムカついたので刀身から“断罪の剣”を出す。

ここからが本番だった。

短剣を振るい、師範代さんに向かって魔力を込めた斬撃を飛ばす。

当然斬撃は迎撃されるが、その瞬間に後ろに回り込むが、師範代さんは振り返り返りざまに斬りかかる。

それを屈んで躲し、師範代さんに蹴り込んだ。

師範代さんは蹴りには反応できず同時にまともに喰らひ。

これが師範代さんはまともに立れた始めてのダメージだった。

「ふふ やっぱり涼クンはずいこね」

「あれでまだ六歳とは恐れ入るな」

「やつぱり木乃香のお嬢さんになつてほし〜わ〜」

師範代さんが起き上がる前に短剣を突きつける。

「やめつ！…勝者同条つ！…」

道場内でどよめきが起る。俺が勝利したのが意外だつたのだろう。確かにまだ続けることはできただらつが、あの場面で一応、俺の勝ちは決まつていた。

「さすがだつたね涼君、では次は私とやらつか

師範代さんとの試合が終わつ互いに挨拶を終えると次は詠春さんと対峙する。

詠春さんは木刀だがその気迫はさすが英雄と言えるものだった。

ガキーン

審判の合図を待たずしてお互に打ち合つ。

流石は英雄だ。全く隙が見えない。

「鍛錬は欠かしていませんから、技は衰えていませんよ」

「よく戦つよ 衰えているビリカキレがましてゐるのこ

詠春さんの攻撃は早いがこっちが反応できるギリギリまで手を抜いてくれている。

正直出し惜しみをしたくなかったので距離をとると、 “神斬の太刀” を展開する。そしてその場で魔力を込め、詠春さんに向かって振るう。

「式の太刀“空裂き”」

この技は “地碎き” とは違い斬撃を飛ばす。その威力は “地碎き” には少し劣るがかなりの高威力だ。

この技にはかなりの自信があった。

「斬魔剣！！」

ただ、英雄には通用しなかった。魔力で作られた斬撃を詠春さんは斬る。ダメージは欠片も見られない。

「斬空閃！」

“空裂き” の反動で力の入らない身体に詠春さんの放った “斬空閃” が直撃する。

結局、詠春さんには一撃も入れることはできなかつた。

まだまだ英雄を相手をするには力量が足りないようだ。

この日からは詠春さんが稽古をつけてくれた。詠春さんはスバルタでこちらの限界ギリギリで訓練を行う。

「ついで、京都での一週間が終わる。

」のひと円、詠春さんはトウカンのお陰で近接戦闘の技術は目を見張るほど成長したとあざけに言われるが正直自信がない。

詠春さんやトウカンさんは言わずもがな、師範代さんやトサカさんに勝利したわけではないからだ。

師範代さんは一本を取つたものの完全な勝利を収めた訳ではない。

まあ、六歳では充分だと詠春さんは言つてくれたが……

そうして1ヶ月の旅を終えて麻帆良に帰つてくる。たつた1ヶ月だったがこの麻帆良の雰囲気が懐かしく思つ。

そしてようやく家に戻つてきた。家の玄関を開けて大きな声でみんなに帰つてきたことを伝える。

「ただいまーーー！」

俺の声に反応してみんなが玄関に集まつてくれる。

「「「お帰りなさいーーー！」」

こうしてみんなの顔を見ると帰つて来たんだなと思つ。

「疲れてるでしょ。食事は作つてるから、その時にお話しをきかせてね」

「無事でよかつたよ。ゆっくり休んでくれ」

「涼く〜ん、お話しいつぱい聞かせてね〜」

俺のひと円の修行の旅は終わり、そしてまた麻帆良での毎日が始ま
る。

次の日、図書館島に行きクウネルたちに旅の報告をする。

報告が終わると、エヴァが旅の成果を見たいと言つて、チャチャゼ
ロとエヴァの二人と戦うことになった。

目の前にはエヴァとチャチャゼロがいる。俺が構えるのと同時にエ
ヴァとチャチャゼロが攻めてきた。

「“魔法の射手 氷の57矢”」

「ケケケ、行クゼズズミ」

エヴァが魔法を放ち、チャチャゼロが一気に踏み込んでくる。

エヴァが放つた“魔法の射手”を回避しつつ、チャチャに対して力
ウンターを叩きこむ。

旅に出る前の俺ではエヴァの“魔法の射手”を避けることはできな

かつたし、チャチャゼロの攻撃にカウンターを合わせぬことはできなかつただろう

リーチの差でチャチャゼロにカウンターが決まり、チャチャゼロは後方に吹っ飛んだ。

「チャチャゼロ……」

エヴァがチャチャゼロに氣を取られているうちに“神斬の太刀”を展開する。

「式の太刀“空裂き”」

そしてエヴァに向かつて全力で“空裂き”を放つ。

“空裂き”は真っ直ぐエヴァに向かつて飛んでいく……

「なにい！？」

チャチャゼロに氣を取られて反応の遅れたエヴァに直撃する。その間に魔法の詠唱を始めた。

「来たれ地の精花の精、夢誘う花纏いて蒼空の下、駆け抜けよ一陣の風！！」

エヴァの姿が現れる。ダメージは直撃だつたので通つていいようだ。

「“春の嵐”！？」

「“断罪の剣”！？」

全力で魔法を放つが立て直したエヴァが“断罪の剣”で迎撃をされる。

俺の“春の嵐”とエヴァの“断罪の剣”は拮抗するが、徐々に均衡が崩れ俺の魔法が押されている。

高位の魔法はまだ覚えたてなのでやはり練度が足りなかつたようだ。そうだった。

「確かに威力はまだまだだつたが覚えたてと言つことは上等だ。近接戦闘も私の“魔法の射手”を回避しながらチャチャゼロにカウンターを合わせられるほどレベルアップした」

「そうですね、年齢を考えれば異常なほど的力量です

エヴァの機嫌は良い。クウェルもレベルアップした力量に満足しているようだ。

「魔法世界での戦闘経験がお前の力量を底上げしたんだろう。やはり、実戦が一番だな」

こつして旅の報告も終わり、俺の旅は終了を迎えた。

第9話 基礎は大切ですね（後書き）

作者は明日から少々忙しくなりますので、これまでのよつに連続投稿ができないと思います。

更新予定はきちんと守りますので、これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3073y/>

魔法先生ネギま！？～願い事は叶えられますか？

2011年11月20日12時36分発行